

群 教 セ	G14 - 01
	平 17.225集

総合的な学習の時間のカリキュラムの 充実に関する研究

- 全体計画の作成及び地域素材を生かした単元開発とその考え方 -

長期研修員 廣木 泰
長期研修員 糸井 隆志

(研究の概要)

本研究は、総合的な学習の時間の「内容」の重要性に着目し、各学校における系統性や発展性を考慮した内容をまとめた「内容系列表」の作成・活用を中心に、総合的な学習の時間本来の趣旨を生かしたカリキュラムの充実を目指したものである。

また、ウェビングによる単元構成、教科と同様の4観点による評価、地域素材を生かした単元開発の実際などについて、小学校・中学校別に示したものである。

キーワード 【総合的な学習の時間 - 小 - 中 内容系列表 地域】

研究目的

平成14年度より実施された学習指導要領に創設された「総合的な学習の時間」(以後「総合的な学習」という。)は、一定のまとまった時間を設けて横断的・総合的な指導を実施し、学び方やものの考え方の習得、主体的な問題解決などへの態度の育成、自己の生き方について考えを深めていくことなどを目指している。そして、[生きる力]をはぐくむという学習指導要領の基本的なねらいを実現する上で極めて重要な役割を担うものとされている(平成8年中央教育審議会答申及び平成10年教育課程審議会答申)。

また、総合的な学習は、これまでとかく画一的といわれてきた教科の授業と異なり、地域や学校、子どもたちの実態に応じ、学校が創意工夫をして特色ある教育活動が行える時間、国際理解、情報、環境、福祉・健康など従来の教科をまたがるような課題に関する学習を行える時間である。

しかしながら、総合的な学習が実施されるにつれ、いくつもの課題が表面化してきている。具体的には、平成15年10月7日の中央教育審議会の「初等中等教育における当面の教育課程及び指導の充実・改善方策について」の2章3(報告書巻末に記載)に述べられている。これを受けて、平成15年12月26日の学習指導要領の一部改正により、総合的な学習の一層の充実が求められている。

群馬県でも、平成16年12月に群馬県総合教育セ

ンターより報告された「群馬県内小中学校における総合的な学習の時間の評価等に関する調査報告」において、「身に付けたい力が明確にされていない」、「評価規準が作成されていない」、「よい点や伸びた点、身に付けたい力を分かりやすく伝えられていない」といった問題点が出されている。アンケートの中の「総合的な学習の時間を実施していて何を課題と感じますか。」という質問(複数回答)では、「身に付けたい力の把握」51%、「評価(内容・方法)」48%、「指導方法」44%、「カリキュラム開発」39%、「教材研究の時間の不足」35%などが課題としてあげられている。

さらに、平成16年10月1日に群馬県教育委員会より、「平成16年度小中学校教育課程の編成及び実施状況調査を踏まえた指導について」の1(3)では、「総合的な学習については、本来、学校行事であるものを充てている学校があることなどから、『総合的な学習』本来のねらいを達成するために適切な学習内容に改善すること」などが指摘されている。

以上のことより、本県の総合的な学習の実施にかかわる課題として、全体計画(全体構想図、内容系列表、年間指導計画)が未整備か十分に機能していないことがあげられる。つまり、各学校において具体的な「目標」、「内容」を明確に設定せずに活動を実施したため、必要な力が児童生徒に身に付いたか否かの検証・評価が十分に行われていないなどの実態があることが分かる。

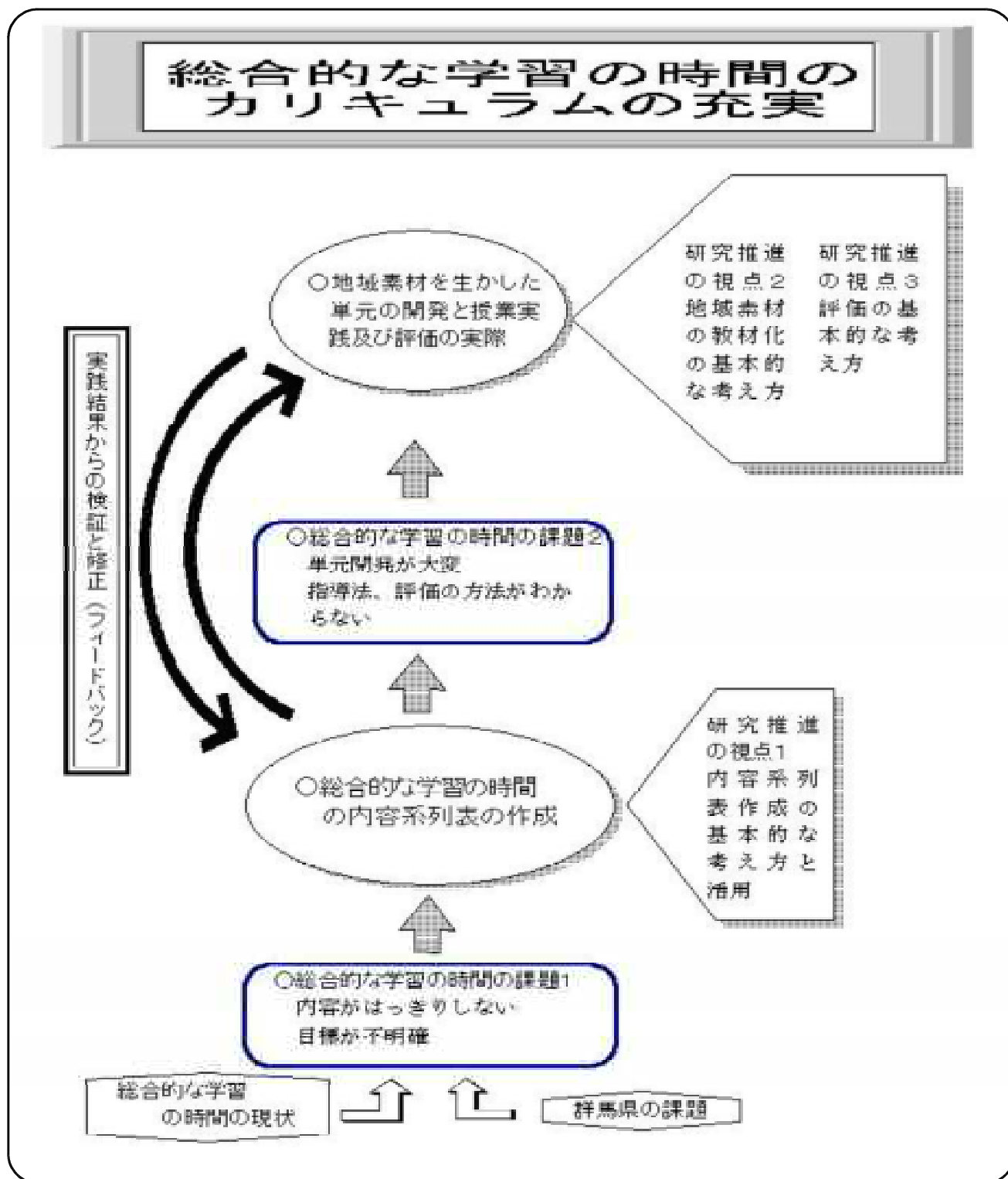
これを受けて、群馬県総合教育センターは、Webページ上の「群馬県内小中学校における『総合的な学習の時間』の実施状況と成果に関する調査の結果と考察」の中で、三つの緊急アピールと七つのすすめを発信している。

本研究は、小・中学校における総合的な学習の全体計画作成のための要件や全体計画に基づいた

地域素材の単元開発の考え方を明らかにするとともに、その考え方に基づいて、小・中各学校において地域素材を生かした単元を開発し、授業実践することで、本県の総合的な学習の充実に役立てようとするものである。

研究の計画

図1 研究の構想図



- ・全体計画作成に関する基本構想
- ・単元開発の考え方と実践及び評価
- ・全体計画作成と単元開発

研究の目標及び内容と方法

1 目標

全体計画（全体構想図・内容系列表・年間指導計画）の作成についての基本的な考え方を検討し、その活用の視点を明らかにするとともに、単元開発の方法や手順、評価に関する考え方を実践を通して明らかにする（図1の研究の構想図を参照）。

2 内容

- (1) 全体計画（全体構想図・内容系列表・年間指導計画）作成についての基本的な考え方の検討
- (2) 内容系列表の活用の視点の明確化
- (3) 地域素材を生かした単元開発の方法や手順、評価の検討

3 方法

- (1) 先行研究や文献の分析と群馬県の課題の分析
 - ・先行研究や文献の分析と群馬県の課題の分析を行い、全体計画作成の基本的な考え方を明らかにする。
- (2) 地域素材を生かした単元開発と授業実践記録
 - ・(1)を生かして実際の単元開発を行い、内容系列表を基に地域素材を生かした単元開発の方法や手順・評価についての考え方を明らかにする。
 - ・授業実践記録を分析し、単元開発の考え方と実践・評価のWeb発信を行う。

研究結果の分析と考察

1 群馬県の課題の分析

平成16年度に総合教育センター研修員を対象とした「群馬県内小・中学校における『総合的な学習の時間』の実施状況と成果に関する調査」が実施された。

その中で、「充実や改善に関して、学校で課題となっていることについての記述」として、調査結果が報告されている（資料編参照）。

これを見ると、発達段階や系統性からの見直し、

教科等との関連など、「学習内容に関すること」を課題とする学校が小・中学校ともに60%を超えている。次いで、指導・支援の内容や方法の工夫や改善、指導体制の工夫など「指導に関すること」が高い割合を示している。どちらも、教科であれば学習指導要領に明示されていることである。この結果から、この研究目的でも述べたように、総合的な学習にも、教科等のように目標・内容に当たるものをまとめたもの（内容系列表）を作成することが学校現場の急務であるといえよう。

目標、内容を各学校で明確に示すことにより、上記の二つの課題についての改善が期待できる。

また、ほかの課題（年間計画に関すること、評価に関することなど）についても解決の糸口が見えてくると思われる。

さらに、作成するだけでなく、単元の開発や評価の際に積極的に活用していくこと、そうした実践を繰り返しながら内容系列表を更新していくことが、今後、重要になってくると思われる。

2 先行研究や文献の分析から

参考文献に示す先行研究や文献の調査・分析を通して、総合的な学習で扱う内容を決定するためのよりどころや内容系列表の作成についての検討を行った。

- (1) 内容系列表作成の基本的な考え方
総合的な学習の内容編成の必要性

総合的な学習の時間は学習指導要領の総則にねらいは示されているが、目標や内容は示されていない。各学校ごとに、地域や学校、児童生徒の実態などに応じて創意工夫のあるものを具体化していくことが期待されている。

総合的な学習の目標及び内容が明確になると、「何を教えるか」、「何を学ぶのか」が明確になる。当然、学びの中で、どのような学力を身に付けることができるのかが見えてくる。また、教科等と同様に内容から評価規準を作ることができ、目標準拠評価も可能になる。

内容のよりどころ

内容編成をするときに留意する点として四つのポイントがあげられる（図2を参照）。

第1に、総合的な学習のねらいは「学び方」と「自己の生き方を考えること」である。「学び方」は、各教科等でも育てるものであることから、総合的な学習の時間固有のねらいは「自己の生き方を考えること」である。したがって、「自己の生

き方を考えること」ができる内容を考えることが大切である。

第2に、学習指導要領の示されている三つの例示課題「国際理解、情報、環境、福祉・健康などの横断的・総合的な課題」、「児童生徒の興味・関心に基づく課題」、「地域や学校の特色に応じた課題」を参考にして、各学校で内容を定めることが大切である。例示は、先進的な取組を基にあげられたものなので参考にすることができる。このほかにも、職業や進路などの生徒の興味・関心に基づく課題から考えられる内容や、地域や学校の特色に応じて「地域文化」などの内容も考えられる。児童生徒や地域、学校の実態・状況に応じて、学校教育目標なども勘案して考えることが大切である。

第3に、これまでに実践してきた単元を振り返り、児童生徒がどのように「生き方」を学んできたか、あるいは、学ぶことができるかを検討して、もう一度内容を検討していくことも大切である。

第4に、小・中学校の連携を考える必要がある。「小学校の時の方がよくやっていた」、「中学校でも同じことをやっている」などの問題は、年齢に応じた内容のレベルなどが意識されていないからである。中学校区ごとや市町村単位の教育委員会などでマスタープランを作成し、発達段階に応じた内容を設定することで、内容の重複をさけ、学びを高めることができる。

学習指導要領に例示

された課題例について

学習指導要領に例示された各課題にはどのような目標や内容が含まれているかを考えて、各学校における目標及び内容を考える際の参考として役立てたいと考えている。

ア 国際理解

現在、国際化の波が進展し、今後ますます加速していくことが予想されている。このような社会生活上の変化に対応する教育が必要になる。

このような国際化に

向けた教育を考えていくとき、「人と人との相互理解・相互交流を基本に国際化に対処することができる子どもの育成」を内容として決定する際の基本的な視点と考えることができる。

イ 環境

今日、地球温暖化、オゾン層の破壊、砂漠化等の地球規模での環境問題や、大気汚染、騒音問題、水質汚濁やゴミ問題といった地域規模での環境問題の深刻化が大きな課題となり、これらの社会生活上の諸問題に対応する教育が必要となる。

このような環境問題への対応に向けた教育を考えていくとき、「全地球的な視野に立ち、人間と環境のかかわりについての理解を深め、自然と共生し、身近なところから具体的な行動ができるような子どもの育成」を内容として決定する際の基本的な視点と考えることができる。

ウ 福祉

現在、わが国は「少子高齢化社会」を迎えている。このような21世紀の社会においていかに生きていくか、生きていくべきかにかかわる教育が必要になる。

このような「少子高齢化社会」への対応を含め、将来に向けた教育を考えていくとき、「国民一人一人が自立しつつ、年齢や性別にかかわらず、お互いに助け合いながら、多様な価値観に基づく自己実現を図ったり、心の豊かさを実感しつつ、

図2 内容のよりどころ

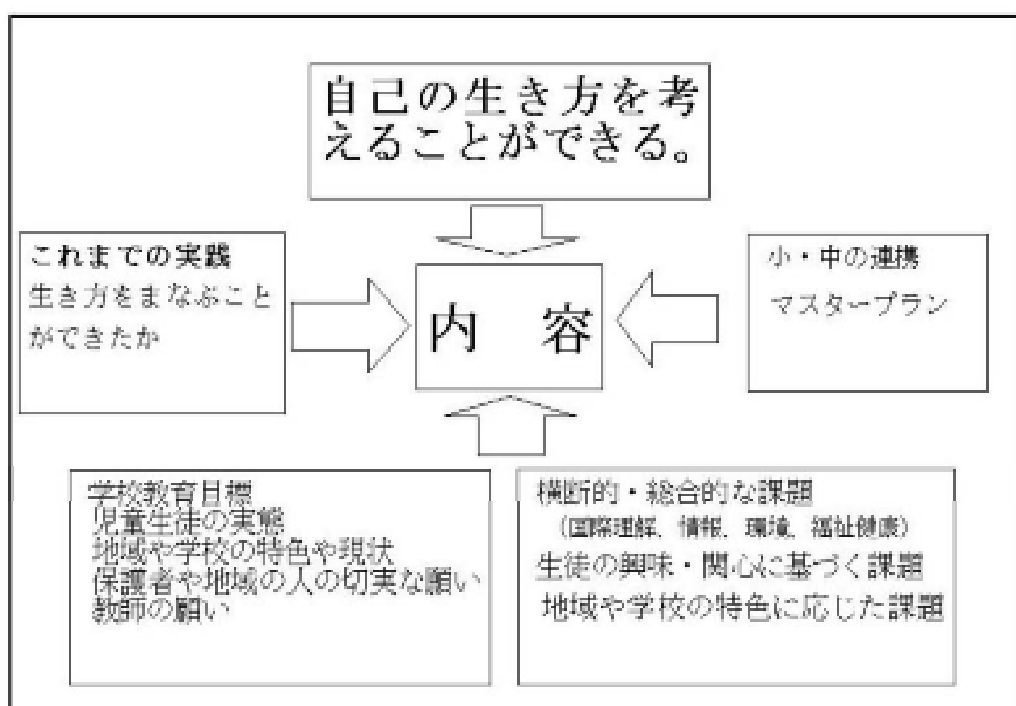


図3 内容系列表（群馬県総合教育センター）

「総合的な学習の時間」内容系列表（群馬県総合教育センター執筆2003年版）

領域	領域別の目標	領域別の内容	各 学 年 の 内		
			小学校3・4年	小学校5・6年	中学校1・2年
国際理解	人と人との相互理解・相互交流を基本に国際化の進展に対処することができるように、日本や世界の国々の歴史や文化に関心をもち、異文化理解を深め、異文化を尊重し、国際社会の一員として共に生きていくことのできる資質や能力を育てる。	ア異文化理解及び異文化尊重の態度 イ共生（国際交流・協調） ウ地域や自国の歴史や伝統文化等の理解及び自己の確立 エ外国語によるコミュニケーション	ア世界の様々な国の歴史や文化を鑑み、それぞれに気付く。 イ様々な国の人々と交流し、だれでも仲良く助け合おうとすることができる。 ウ郷土の文化や先人の偉業、歴史について調べ、興味・関心をもつ。 エ外国語の興味を、関心をもち、歌や言葉を親しむ。	ア世界の様々な国の歴史や文化について理解を深め、視野を広げる。 イ様々な国の人々と交流し、それぞれの国のよさを尊重するとともに、大切にしようとする。 ウ日本の歴史や伝統・文化について学び、大切にしようとする。 エ外国語に興味・関心をもち、簡単な日常会話に慣れ親しむ。	ア他国の歴史や文化への関心を高めるとともに、そこに見られる共通性や差異を理解し、尊重しようとする。 イ異なる立場や考えの人、外国人などと協調し活動しようとする。 ウ自国のよさを見つめ、日本人としての自覚をもち、自己の在り方を考えようとする。 エ外国語によるコミュニケーションを積極的に図る。
情報	様々な学習や生活との関連において、多くの情報の中から自分に必要な情報を収集・選択し活用することができる。情報の種々の発信ができる資質や能力を育てる。	ア情報収集と活用 イ責任ある情報の発信	ア課題意識をもって、必要な情報を収集・選択し、生活に役立てようとする。 イ相手の気持ちを考えた情報発信ができる。	ア多様な情報源を用いて、目的に応じた適切な情報を収集・選択・整理し、生活に生かすことができる。 イ受け手の願いや状況、メディアの特性などを考慮し、責任ある情報の発信ができる。	ア課題や目的に応じて情報手段を適切に活用し、必要な情報を収集・選択・整理・処理し、生活に生かすことができる。 イ社会生活の中で情報や情報技術が果たしている役割や及ぼす影響を理解するとともに受け手の状況を踏まえ責任ある情報の発信ができる。
環境	身近な自然に積極的に関わり、自然のもつ豊かさや大切さに気付く。生活と環境のかかわりについて理解を深め、自然と共生し、自分で	ア自然に対する感受性や環境への関心 イ環境問題と生活様式とのかかわりについて	ア様々な体験活動を通して、身近な自然に親しみ、自然の大切さに気付く。 イ身近な環境問題を知り、それは自分たちの生活と関係	ア自然に対する豊かな感受性や環境に対する関心を高め自然を大切にしようとする。 イ環境問題の現状について、科学的な方法を用いてとらえ	ア多様な視点や論理で地球規模の自然を見直し、自然保護に必要な生活の在り方を考える。 イ生産・流通・消費といった人間の生活の営みが、様々な面

生きがいをもって生きていける社会の実現に取り組むことができる子どもの育成」を内容として決定する際の基本的な視点と考えることができる。

エ 児童生徒の興味・関心に基づく課題

児童生徒の興味・関心を考えると、上記にあるような国際理解や環境問題、福祉にかかわることもあるが、それ以外にも視点を向けて考えてみる必要がある。将来の社会生活を営む人間が備えるべき、比較的個人的・内面的な特質にかかわる側面を考えてみた。

将来、社会人として対応していくための教育を考えていくとき、「心身ともに健康で安全な生活の保持・増進に努める子どもの育成」及び「芸術・文化・娯楽にかかわる活動に取り組み、活動の楽しさを味わうとともに、情操豊かな生活を過ごすことができるような子どもの育成」、「将来の自分について、自己を見つめ考えることができる子どもの育成」を内容として決定する際の基本的な視点と考えることができる。

具体的には、「芸術・芸能作品の創造や鑑賞、ものの表現及び制作的な活動など」、「遊び・趣

味・娯楽にかかわる活動」、「心身ともに健康で安全な生活」、「進路や職業」などが考えられる。

オ 地域や学校の特色に応じた課題

地域や学校が独自に抱える諸問題に対応できるような教育の展開を考えると「家庭や地域社会、学級や学校における生活上の諸問題について理解を深めるとともに自他を尊重しつつ、民主的な生活の実現に意欲的、協力的に取り組む子どもの育成」を内容として決定する際の基本的な視点と考えることができる。

具体的には、「家庭や地域の伝統・文化・行事・生活習慣・地域の政治・経済・産業など」や「学級・学校の行事、学級や学校で生じる生活上の問題」などが考えられる。

カ 情報

今後ますます進展していくであろう高度情報化（通信）社会において「情報や情報機器を主体的に選択し、活用するとともに、情報を積極的に発信することができるようになるための基礎的な資質や能力を育成すること」や「情報教育の光と影の部分克服していく教育」が重要となる。その

ため、ア～オの諸内容の学習との関連において、学んでいきたい内容である。

(2) 内容系列表作成と活用

内容の検討・決定

本研究の(1)基本的な考え方 内容のよりどころを基に、各学校の教育目標のもと、総合的な学習で「目指す児童生徒像」、「培うべき資質・能力」を明確にして内容を考えるようにする。

総合教育センターや教育委員会で示された内容系列表を基にして、中学校区内の小・中学校でそれぞれの実態を考慮して、独自の内容系列表を作成するとよい。

内容領域の目標と内容を検討する

地域や学校、児童生徒の実態から、必要あるいは実現できそうな内容領域を各学校で検討できたら、次は各内容ごとに目標や内容の具体化を図るようにする。具体的には、教科における各領域と同じに考えることができる。「生きる力」を培うのに、それぞれの内容領域でどのような目標が必要であるか、その目標を実現するためにはどのような具体的な内容が必要であるかを考える。また、発達や特性を考慮して学年ごとに具体的な内容を高めることができるように考えるとよい。学習指導要領の各教科の学年や領域ごとの目標及び具体的な内容を参考にすることができる。総合的な学習の場合は、「生きる力」を培うための各領域ごとの目標や内容をそれぞれ検討することになる。

その際、総合教育センターの内容系列表(学校の経営N o 37・図3)を参考にすることができる。

内容系列表を作成する

国立教育政策研究所平成17年度3月発行の研究報告書「総合的な学習の授業及び評価に関する開発的研究」にある内容の編成フォーマットを参考にすれば、縦列に内容(スコープ)を、横列に校種・学年別の児童生徒の発達的特質(シーケンス)を配置してその交差した枠内に内容を具体化していくようにすることができる。

発達特性に配慮することで、同じ内容での学びの高まりが期待できる。中学校での総合的な学習を検討する際には有効である。

内容系列表活用の視点

内容を検討して内容系列表を作成したことで、それぞれに学校における学習指導要領に準じたものができた。これにより、総合的な学習の目標と内容が明確になり、これらの価値項目を学ぶことができる単元を構想し、学習活動を展開していく

ことができるようになる。また、評価もしっかりとできるようになる。

単元の構想や学習活動の展開、評価の検討において、内容系列表は、各教科で学習指導要領を活用するのと同様に、総合的な学習で活用することができる。

また、経験単元として、子どもの求める活動を展開していく中で、学ぶべき内容を意識しての学習へと教師が導くことができる。

評価においても、内容が明確に示されることで、何をどのように評価するかも各教科において評価をするのと同じようにすることができるであろう。

さらに、学級ごとに、または、毎年の学年で単元が異なっても、内容系列表に示す内容を学ぶことで子どもたちの学びは保証される。内容と単元を切り離して考えることができる。

3 地域素材の教材化

(1) 基本的な考え方

学習指導要領で示された総合的な学習のねらいの中で、総合的な学習固有のものは「自己の生き方を考えることができる」である。いかに体験的、あるいは活動的な学習であっても、子どもに「一人の生活者として自己の生き方を考え、改善しようとする」ことが生じない限り、それは総合的な学習ではないと考える。

それゆえ、子どもが実際に生活している「地域」から、子どもが自己の生き方を考えることができるようになるために適した素材を教材化することが大切なのである。

(2) 教材化に当たっての留意点

(1)で示した基本的な考え方に基づいて選定した地域素材を教材化する際の留意点として以下のようなことが考えられる。

ア 子どもの学びの履歴を生かす

総合的な学習は、経験単元で構成される。教材化に当たっては、子どもの求め(興味・関心など)を把握することが重要になってくる。といっても、単に「好き・嫌い」とか「やりたい・やりたくない」ということではない。学習に関する興味・関心を把握するのである。

多くの場合、子どもたちは、それまで経験したことがないことについては興味・関心を示さない。多少なりとも過去に学習したことについては、興味・関心をもつ。以前ちょっとやってみたこと

をもう少し深めようとする。

それゆえ、初めて総合的な学習を体験する小学校三年生ならば、一、二年生の生活科でサツマイモや野菜を栽培してきたという学びの履歴を生かして単元を構成すれば、子どもたちは興味・関心をもち、意欲的に活動することが期待できる。その素材として、カボチャ、大豆、こんにゃくなどそれぞれの地域での栽培に適したものがリストアップできるだろう。

同様に、4年生以上なら前学年の総合的な学習で、中学生ならば小学校の総合的な学習で、それぞれどんな学習に取り組んできたのかという学習履歴を調べることが、子どもの学習に関する興味・関心を把握するために有効であると考えられる。

イ 教師の願いや思いをこめる

教材化する素材は、常に子どもが興味・関心を示すものとは限らない。内容系列表に示されたもので、最初の段階では、子どもが興味・関心を示さないが、教師として、触れさせる価値があると考えるものについては、工夫して教材化する必要がある。

例えば、小学校三年生で、子どもたちは生活科でやったように、何かを育て、それを使って料理して食べたいという活動を希望していた。教師としては、国際理解について触れさせたいと考えていた。そこで、カボチャを育て、それを使ってハロウィンをやろうということで教材化したところ、カボチャには特に興味・関心を示さなかった子どもたちも、ハロウィンという異文化に触れ、興味・関心が高まり、日本とアメリカの文化について考えることができるようになるということも考えられる。

学習が進むにつれて、子どもの興味・関心が高まり、教師が意図した価値に気付くことができればよいのである。

ウ 実際に地域を歩いて素材を探す

ある程度素材がリストアップされたら、教師は実際に地域を歩いてみるとよい。子どもより一足早く、教師が地域を歩いてみて、地域の「もの・こと・人」について学習するのである。教師自身が地域を知ることによって、より適切な素材を選ぶことができるようになるであろう。

エ ウェビングで実現できる内容を確認する

ウェビングは、単元を構成するために有効な手法である。ウェブとはクモの巣という意味で、ウ

ェビングとはクモが巣を作るイメージで単元の構想を練る手法である。

本格的に行うのは、素材を決定して単元づくりに取りかかるときであるが、簡単なウェビングは地域素材を選ぶ手段としても用いることができる。幾つかリストアップした地域素材について、それぞれ簡単なウェビングを行い、実現できる内容を確認してみるののである。

「カボチャならばハロウィンを通して外国の人達と交流し、国際理解について触れられそうだ」「サツマイモならばすばらしい保存食として先人の知恵を学び、地域の高齢者と触れ合うことで福祉について考えられそうだ」といった具合である。

4 総合的な学習の単元構成

(1) 単元を構成するとは

総合的な学習は、教科では学習指導要領にあたるもの（各学校の総合的な学習の目標・内容を示したもの＝内容系列表）を作る必要がある。

その内容を実現するために教材や活動を決め、単元をつくるのが単元構成である。

(2) 単元構成の考え方

二つの単元構成の原理（教材単元と経験単元）
単元構成には教材単元と経験単元の二つの原理がある。

教材単元とは、「系統的に配列された教材の一区分であって、例えば教科書の第1課、第2課というようなまとまり」（昭和26年版「学習指導要領一般編（試案）」）である。いわば内容のまとまりを基盤に単元を構成する考え方であり、「三つのかずのけいさん」「水溶液の性質」といった具合に、単元名も内容で表現されるのが一般的である。教科書も含め、教科指導（生活科を除く）の多くは教材単元を足場に構成・実施されてきた。

教材単元では、教師が価値あるものと認め、子どもに身に付けさせたいと考える内容から単元構成を開始する。そして、次に、その内容を子どもの内に実現するのに適した活動（教材）を理論的、経験的に導き出し、最後に導入の工夫などによって、それを子どもにとっても意味のあるものにしていくのである。

これに対し経験単元とは、「児童・生徒の当面している問題を中心にして、その解決に必要な価値ある学習活動のまとまり」（昭和26年版「学習指導要領一般編（試案）」）とされている。いわ

子どもにとって意味のある問題解決活動のまとまりを基盤に単元を構成する考え方である。

総合的な学習に先がけて実施された生活科の「あきを見つけよう」「生きものランドをつくろう」など、単元名も子どもの活動で表現されている。生活科は、教科書も含め基本的に経験単元が多い。

経験単元では、教材単元と逆の筋道で単元を構成する。まず、子どもの求め（夢、願い、気がかり）があり、次にそれに応じる形で活動を組織し、最後にその展開途上において出会う切実な問題を、子どもによる解決を通して、結果的に教師から見ても教育的に価値のある内容が学ばれるよう構成するのである。

「はじめに子どもありき」と言われるのは、経験単元を採用することであり、子どもの求める活動の展開の中で、結果的に内容が実現されていくよう、単元を構成していくのである。「はじめに子どもありき」の経験単元であっても、その活動展開の途上でどんな内容の実現が見込まれるかを予測しておくことがポイントとなる。

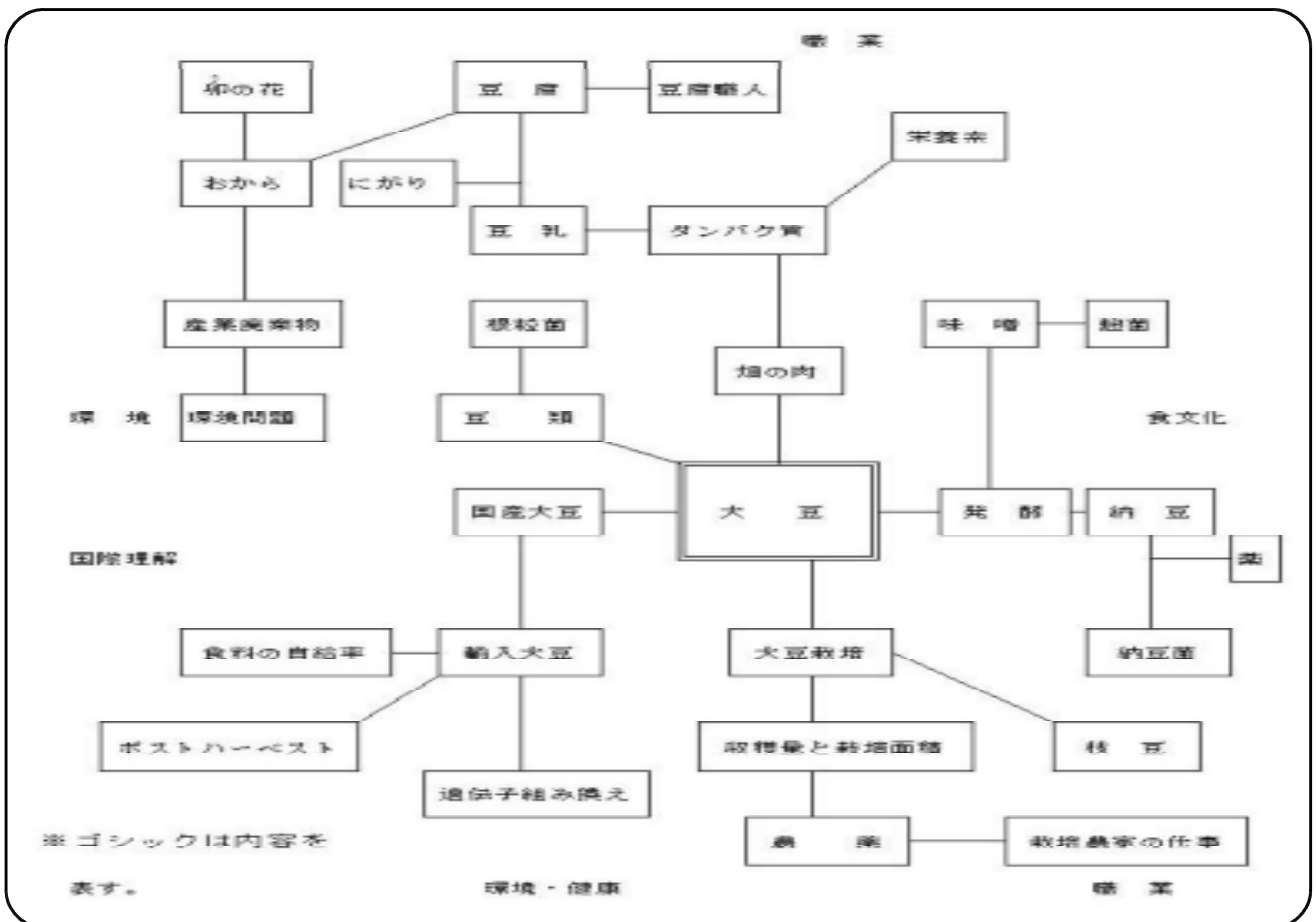
単元構成とウェビング

子どもたちのこれまでの学習経験や生活経験、実践の蓄積などから考え、子どもの求めを出発点として、活動の広がりやつながり、活動の展開途上で出会い、解決していくであろう問題、結果的に学ぶであろう価値的な内容などを想定する。

その時の方法としてウェビングなどが考えられる。教師の教材研究としてウェビングを行う場合、まず、紙面の中心に題材や活動名を書き、それをめぐって展開すると予想される活動や教育的な価値内容を書き出す。この時に事前に作成しておいた内容系列表が生きてくる。

次に地域や学校、学年、学級の実態を考えながら、ウェビングマップを眺め、子どもたちがこのマップ上をどのように進み、どこで立ち止まり、そこで何を考えるか予測するのである。それと同時に、それぞれの場所でどのような価値的な内容を学ぶことができるかという可能性を考えるのである。さらに、そのためには、どのような支援をすればよいかシミュレーションし、展開可能な道筋を探る。これによって、単元のアウトラインをデザインすることができる。また、子どもの自然な意識の流れに沿っているか、価値的な内容（内

図4 単元「大豆を」育てて〇〇を作ろう」ウェビングマップ



容系列表の内容項目)が学ばれる流れになっているかなどを見直しながら単元指導案の様式に仕上げていくのである。

ウェビングを行うことで、活動展開の様々な可能性が明らかとなり、単元の全体像や支援の拠所も見えてくる。このとき、注意することは、ウェビングマップにかいたすべての活動なり内容を実現しようとするわけではないということである。ウェビングマップはその題材にかかわるすべてを網羅したいわばカタログであり、実際の単元はその主体である子どもたちと教師それぞれの願いを核に、さらに様々な制約条件をも考慮に入れながら、そこから幾つかの問題解決活動を選び取って構成していくことが大切である。

図4でウェビングマップを用いての単元の構想の例を示した。「大豆を育てて を作ろう」という単元をウェビングマップを用いて、どんな活動が考えられるか想定したものである。大豆を巡って、ゴシックの文字で示した内容が実現できる可能性を示したものである。

経験単元における活動と内容の関係

前出の「二つの単元構成の原理」に示したように総合的な学習は、子どもの求める活動の展開の中で、結果的に内容が実現されていくよう、単元を構成していきたい。そのために、経験単元による構成を考えたい。その際、活動と内容の関係に留意していく必要がある。

図4では、大豆を巡って「環境」「職業」「国際理解」「食文化」などの内容が実現できるのである。

5 総合的な学習の評価

(1) 評価の観点は「4観点」

平成12年12月4日の教育課程審議会答申では、総合的な学習の評価に関連して、この時間も「自ら学び、自ら考える力や学び方、ものの考え方などの確かな育成に資するよう、評価に当たっては、各教科の学習の評価と同様、観点別学習状況の評価を基本とすることが必要である」として、観点別評価を採用するように提言している。

これを受けて、文部科学省は、平成13年4月27日付の文部科学省初等中等教育局長名による指導要録の改善についての通知文で、各学校において具体的に定めた目標、内容に基づいて観点を定めて評価するよう示し、次の三つの観点を例示している。

「課題設定の能力」「問題解決の能力」等、総合的な学習の時間のねらいを踏まえたもの

「学習活動への関心・意欲・態度」等、教科と同様の4観点

「コミュニケーション能力」「情報活用能力」等、各学校の定める目標・内容に基づいたもの
このうち、 は「学習指導要領に示す目標の達成状況」を評価するために設けたとする昭和55年体制に戻ることになる。また、 は、総合的な学習のねらいや例示課題から考えると、極めて一面的で狭いものであるといえる。

これに対して、 は、総合的な学習も、教科、道徳、特別活動とともに、「生きる力」の育成を目指しているという点では同じで、そのため、4観点で評価を行うことが適当であるとするものである。

総合的な学習で展開される問題解決的な場面において、子どもが興味・関心をもって活動を進め、調べたり、見付けたりしながら思考・判断し、表現して、いろいろな知識、技能、態度を身に付けていく。評価の4観点は、まさに子どもが問題解決するとき機能する資質や能力を示したものである。

したがって、本研究では、総合的な学習の評価も教科と同様の4観点で行うべきであると考え

(2) 評価規準の設定

評価の4観点は、子どもの学びを構成する能力であるので、どんな内容であれ、子どもがそれを学習するときには、常に同時に働く不可欠な能力となる。このため、単元や内容に応じて評価規準の数や特質を変えず、どの単元・内容においても、評価の4観点を基本にして評価規準を設定するのがよいと考える。

また、総合的な学習の時間では、一つの単元を通して複数の内容を学ぶケースも多くなる。そのため、単元を通して指導される目標・内容に基づいて評価規準を設定するのが望ましい。

このため、その単元の学習活動から、子どもがどのような「関心・意欲・態度」をもち、どのように「思考・判断」し、どのような「技能」を働かせ、どのように「表現」し、どのような「知識・理解」を得ることを目指すのかが明らかになるように規準を作成することが大切である。

単元開発の実際

大単元「地域のよさを見直そう」

(富岡市立一ノ宮小学校四年生)

1 単元を構成する

(1) 内容系列表より

一ノ宮小学校では、総合的な学習「夢人里の時間」の目標と内容について、学校で内容系列表(資料編参照)を作成し、それに基づいて学年単位で実践を行っている。

総合的な学習の内容として、大きく三つの視点を定め、その中に具体的な八つの内容項目を設定している(資料1)。

資料1 目標と内容(一ノ宮小内容系列表より)

中学年の目標	
身近な地域のもの・人・ことに興味や関心を持ち、そこから課題を見つけ、自分なりに選んだ方法で解決しようとする。 身近な地域やそこに住む人々とかかわる中でいくつかの情報を選んで調べ、そこから得たことを自分なりの方法で表現しようとする。 自分の身近な地域とそこに住む人々のよさに気付き、友だちと協力して、それを広く周囲に知らせようとしたり、自分の生活に生かそうとしたりする。	
中学年の内容	
人と自然	環境 食と健康
人と社会	人権 福祉 情報 地域の発展
人と文化	国際理解 文化・伝統

内容的な偏りを防ぐため、一ノ宮小学校では、この三つの視点について、中学年で一通り、高学年でもう一度触れるよう単元を構成することとしている。

児童は、3年生の夢人里の時間で、「麦について知ろう」という学習を行った。これは、内容系列表では、「人と自然：食と健康」を主たる内容とした学習だった。そのため、4年生では、「人と社会」「人と文化」のいずれかの内容に触れる単元を構成することにした。

(2) 学習活動の概要

4年生にとって自分が住む地域というのは、いつも変わらずに、そこにあるものという感じで、関心も向かないものである。そこで、以前の6年

生が卒業製作した「一ノ宮カルタ」を導入時に採り入れ、カルタ遊びをしながら地域に関心をもつようにした。

そして、児童に、自分の住む地域の自慢をしようと投げかけ、地域に出て詳しく調べるよう促した。お互いに発表し合うことで、地域についての情報の共有を図ることにした。

また、地域の自慢を1・2年生にも伝える活動を採用入れることにした。これにより、ただ調べたことを説明するだけでは、1・2年生には伝わらないので、内容や伝え方を低学年児童が分かりやすいようにまとめ直すことが必要になってくる。自分の言葉で伝えることの難しさや大切さに気付けば、調べ活動にも必然性が出てきて、より主体的な学習が期待できる。これにより、児童は地域に対して強い愛着をもつことができるのではないかと考えた。

(3) 単元の構想とウェビング

目標、内容を設定したところで、今後、どのように単元を構成していけばよいのか、ウェビングを行って単元のアウトラインを考えた(資料2)。

まず、関心が低いことからゲームのような形で地域に関心をもてるように、過去の卒業生が製作した「一ノ宮カルタ」で遊ぶ活動を出発点とした。そこで触れた地域の「もの」や「こと」について、実際に地域巡りをして調べる活動に移る。その時に会うであろうそれぞれの地域の自慢となりそうな「もの」や「こと」を拾い出してみた。地域によって、多少の偏りはあるが、どの地域にも自慢となりうるものはあることがわかった。

この中からそれぞれの地域の自慢を二つから三つ選び、1年生や2年生に伝える活動へと展開していくこととした。

2 地域素材の教材化

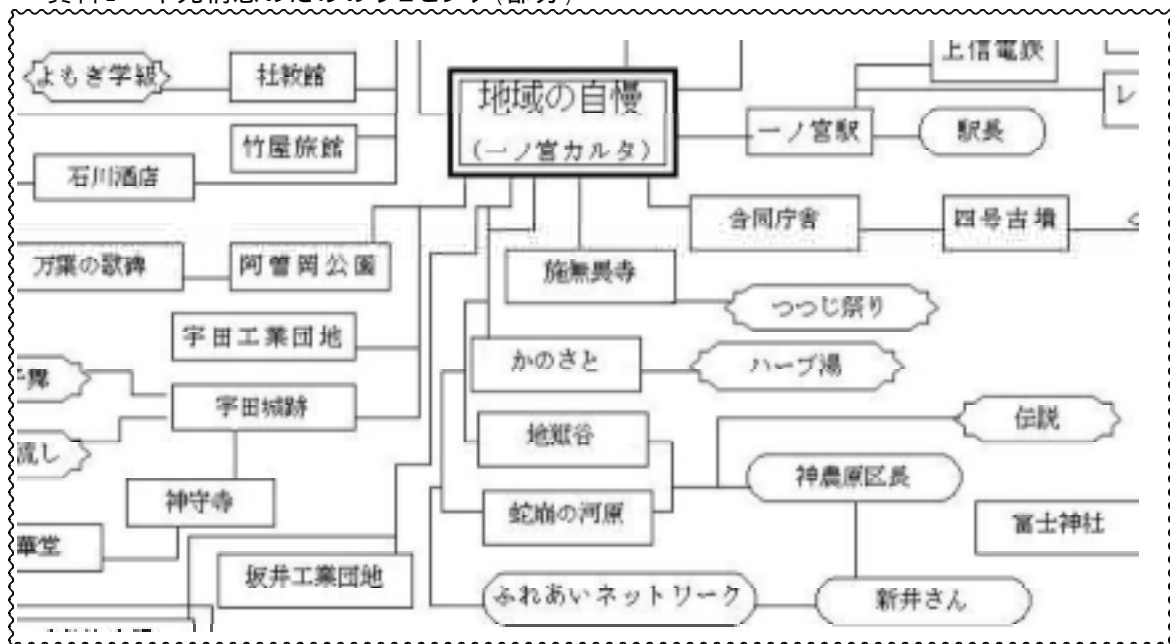
(1) 児童の学びの履歴を生かす

3年生の総合的な学習では、「小麦について知ろう」という学習をした。これは、パン作りを通して、小麦の栄養について考え、それをきっかけにして自分たちの食生活を見直そうという学習だった。

2年生の生活科で野菜を栽培し、収穫したものを調理して食べるという活動を行ってきたので、パン作りには、どの子も意欲的に取り組んでいた。

やがて、パンの材料の小麦の栄養に目を向けるように展開していった。子どもたちは、インター

資料2 単元構想のためのウェビング(部分)



ネットで検索したり家族に聞いたりして、小麦の栄養、それを生かした料理のレシピなどについて調べた。最終的には、自分たちの食生活を栄養のバランスという観点から見直す学習を行った。

この学習履歴から、4年生は、目的がはっきりしていて何かを作る、育てるといった活動を好むということが分かった。

(2) 教師の願い

4年生は、中学年と高学年のつなぎ目の学年なので、やがては学校の代表として地域とかかわる機会が増えることになる。そのときに、より積極的に地域とかかわっていくことができると望ましい。

また、4年生は、社会科で地域学習を行い、地域に出る機会も多い。教科等との関連を図りながら、地域への愛着を強くもつことができれば、地域と積極的にかかわることができる子どもに育ってくれるだろうと考え、自分の地域で自慢できることを見つけ、それを伝えるという「地域のよさを見直そう」という大単元を構想した。

(3) 一ノ宮を歩く

一ノ宮の自慢とは何か。教師自身が、「もの・こと・人」の三つの視点で考えたとき、伝統的価値、文化的価値などから、神社・仏閣などの「もの」と祭りなどの「こと」に偏ってしまう。これは、ウェビングを作った時点で予想されたことである。単元の導入に使用する「一ノ宮カルタ」も同様のことがいえる。カルタにうたわれていることが、やはり、「もの」「こと」に偏っているの

である。

しかも、これらが自慢であることは、大人には伝わったとしても、1・2年生には難しく、十分伝わらないのではないかと。何より、4年生自身がどこまでそのよさが分かるか。いかに自主的に取り組むことができるかが大きなポイントであると思われた。

一つの手だてとして、「人」に目を向けることではないかと考えた。自慢したい「もの」「こと」にかかわる「人」と会うことで、その「人」の地域に対する思いに気付き、その人の思いや願いに共感することができれば、4年生も心から地域を自慢したくなるのではないかと考えた。そして、強い愛着をもてるようになるのではないかと考えた。

そうした視点をもって地域を歩いてみると、それぞれの地域に興味深い人物がいるということが分かってきた。

例えば、カルタにうたわれているものが少なく、目立った施設もない「宇田地区」に、知事から認定された「竹炭名人」がいたり、トマトの水耕栽培を工夫している農家の方がいたり、獅子(しし)舞いの伝承に取り組んでいる人がいたりという具合である。

このように、実際に地域を歩いてみると、総合的な学習のポイントとなることがたくさん見いだせることが分かった。

1	足りないものについて、再調査する計画を詳しく立てる。	・事前に情報を集めてから現地に行くよう助言する。				予定表
4	地域に出て調べ直す。	・どんな情報を集めてくるべきなのか、あらかじめ確認するようにする。 ・交通安全第一で時間的に余裕をもって調べられるよう注意する。				調査カード
1	再調査したものを含め、発表する地域の自慢を決める。	・下級生にそのよさがわかるかどうか、考えてみるよう助言する。 ・グループ全員が納得して選ぶことが大切であることを知らせる。				自慢カード
4	再調査・精選したものをまとめ、5年生に発表する。	・1年生に伝えるときと同じ内容、同じ方法で行うようにする。 ・5年生には発表後に内容や方法に関するアンケートをとり、今後の準備や練習に役立てるようにする。				5年生発表振り返りカード
1	5年生への発表をもとに自分たちの地域の自慢を最終決定する。	・地域の特徴的なもので、なおかつ、1年生にも分かるものを選ぶようにする。				本発表計画書
3.地域のよさを伝える準備をする。(10時間)						
3	決定した自慢を下級生に伝えるにはどうすればよいか話し合う。	・5年生の意見を参考にするようにする。				本発表計画書
5	話し合って決定した伝え方に沿って準備を進める。	・場所は4年1組、2組、図書室のいずれかになることを伝え、必要なものを考えるよう助言する。				準備・練習中の様子(観察) 作成中の発表用資料
1	2年生を対象に地域の自慢を伝える。	・児童自身が、まとめ方や伝え方の長所・短所を実感できるよう、直前の助言はあえて行わない。 ・発表終了後、2年生に簡単なアンケートをとる。				2年生発表振り返りカード
1	自分たちの発表を振り返る。	・アンケートの集計結果を伝え、自己評価、総合評価をし、内容や方法を見直すようにする。				2年生発表振り返りカード
4.宮小フェスタで1年生に発表する。(6時間)						
1	まとめ方、伝え方の課題を明確にする。	・何をどうするのか、できるだけ具体的に出すようにする				振り返りカード3
3	修正を加え、最終的な準備をする。	・練習しながら、気付いたところはどんどん修正するように助言する。				練習の様子(観察)
1	1年生を招き、それぞれの地区の自慢を伝える。	・正確に言ったり、読みだりするよりも、1年生に分かってもらうことの方が大切であることを確認する。				発表の様子(VTR)
1	今までの学習を振り返る。	・2学期の夢人里の時間の学習で特に印象に残っていることを、だれかへ				2学期の夢人里振り返りカード

	<p>の手紙という形で表すようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・何を書けばよいのか分からない児童のために、がんばったこと、がんばれなかったことなど具体的な内容や教師、保護者、地域の人などだれにあてて書くかということ为例示する。 				
--	--	--	--	--	--

(5) 学習活動の実際

社会科の地域学習の経験を生かしながら、より深く地域とかかわることによって、地域への愛着がもてるよう、「地域の自慢を一年生にしよう」と子どもたちに投げかけて、単元の学習は始まった。

子どもたちは、11月末に予定されている宮小フェスタで1年生に各地域の自慢を伝えるために活動を進めていった。

地域の自慢について考える

子どもたちは、各地域ごとに班を編成し、調べたり相談したりしながら、その地域の自慢を決めることにした。

地域の自慢、地域のよさについて、子どもたちの中には具体的な基準はなかった。そこで、教師は、自慢を選ぶときの基準として、「周辺で一番（優れている）・一つしかない・だれもが自慢と認める」の3点を示した

宮崎班は、茂木家（日本一古い板ぶき民家）、宮崎菜（郷土名が付いた野菜）、八木節（地域の伝統芸能）の三つを自慢の候補としたが、神農原地区にもあるからという理由で、八木節を外そうとした。

教師は、保存会の方々ががんばっている八木節こそ宮崎の自慢にふさわしいのではないかと考えていたので、候補として残し、神農原八木節との違いなどについて、もう一度保存会の人に尋ねてみることを勧めた。

宮崎班は、「もの」として「茂木家」「宮崎菜」、「こと」として「八木節」、「人」として「八木節保存会」を自慢の候補に選び、再調査を行うことにした。

地域の人に学ぶ

宮崎班は、自慢の候補にあげたものについて、それぞれ地域の人に教えていただくことにした。1学期の学習では家族からの情報で済ませていたことについて、実際に携わっている方に直接会っ

て、お話を聞くことにしたのである。

茂木家については、そこを管理している方に、宮崎菜については実際に栽培している同級生の祖父に、八木節については保存会の代表の方に、それぞれインタビューに応じていただくことができた。（資料3・4）

資料3 宮崎菜についてインタビュー



資料4 保存会の方にインタビュー



地域の人と直接会ってお話をうかがう中で、子どもたちは、その人たちの情熱を感じとったようである。宮崎班は、「茂木家」「宮崎菜」「八木節」の三つを迷わず地域の自慢とすることを決定した。

地域の自慢を伝える

自慢が決定したので、次は、それをどのような形で1年生に伝えるかを考えた。

劇、紙芝居など発表方法は一年生が喜びそうなものを取り入れているが、教師から見て、内容がまだまだ難しいのではないかと思える班が多かった。宮崎班の茂木家について発表するグループも、富岡市のパンフレットに記載されている文章をそのまま模造紙に書いて発表しようとしていた。

だが、4年生は、振り返りカードの「これで一年生に自慢を伝えることができるか」という質問に対して、全体の89%の子どもが「大丈夫」、「何とかなる」と回答した。(今のままでは)「無理」と回答した子どもは11%だった。

教師の観察と子どもたちの自己評価との格差が見られたので、急ぎよ、昨年4年生の夢人里の時間で貫前神社の御遷宮祭について学習した現在の5年生に地域の自慢を伝える活動を設定した。その結果、5年生からは内容や発表方法について、参考となる意見をたくさん出してもらうことができた。発表についての4年生の自己評価も、内容や発表方法についてはまだまだ改善の余地があるというものが72%にのぼった。

宮崎班では、茂木家のグループは、できるだけ簡単に「日本一古い木造民家である」ということだけを伝えるよう内容を検討した。宮崎菜のグループは、「宮崎で育ててこそおいしい」ということを劇で強調することにした。八木節のグループは、土曜日の夜に保存会の方に踊りを習い、それを1年生の前で披露することにした。

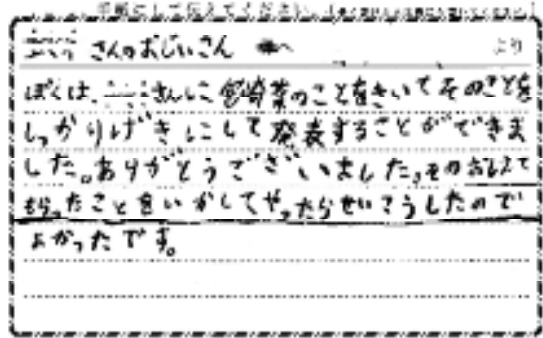
予行練習として2年生への発表を行い、最終的な修正を加え、11月27日の宮小フェスタで、一年生に地域の自慢を伝えた。後日、一年生に、担任を通して4年生の発表についての感想を聞いてみると、内容的に難しいと思われたものについては十分伝わらなかった部分もあるようだったが、自分の地域にはこんな自慢があるということは伝わったのではないかということだった。

学習を振り返る

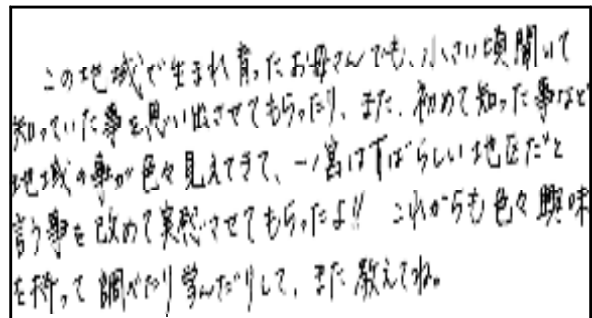
フェスタ終了二日後、4年生は、本単元の学習を、関心・意欲・態度など4観点で振り返り、自己評価を行った。また特に印象に残ったことを感想にまとめた。何を書いていいかわからないという児童がいることも考慮し、「がんばったこと、がんばれなかったこと、うれしかったこと、つらかったことなど」を手紙の形式で書いてみるよう指示した。

宮崎菜について発表したグループの児童は次のような感想をまとめた(資料5)。発表を見た保

資料5 児童の振り返り



資料6 保護者の感想



護者からも感想が寄せられた(資料6)。

地域の自慢をするという今回の単元は、4年生が進んで取り組むには難しい単元だったと感じた。しかし、子どもたちをはじめ、保護者も地域を見直すきっかけとなり、親子で地域への愛着を深めることができたのではないかと考える。

4 成果と課題

(成果)

内容系列表に内容が明示されているので、常に内容を意識して、単元を構成することができた。また、内容が明確になることで、目標、評価規準を設定しやすくなった。

4観点による評価は、教科と同様に行えるので違和感がなく、児童がどの学習過程にあっても評価することができた。

(課題)

もっといろいろな視点からウェビングを作ることができれば、児童の活動をより具体的に想定することができたのではないか。児童がより自主的に活動に取り組めるような効果的な助言や支援が行えたのではないかと思う。

活動がグループで行われるようになると、一人一人を見取ることが難しく、振り返りカードの形式や内容を工夫する必要がある。

単元名「大間々町活性化プロジェクト」

～ 残そう！大間々 創(つく)ろう！大間々 ～
(全指導時数 30時間)
大間々町立大間々中学校3年生

1 単元を構成する

(1) 内容系列表より

本校の学校教育目標やこれまでの総合的な学習の取組、教師の願いなどを基に内容系列表を作成した。

本単元は、大間々中学校内容系列表の「地域」、対象学年を3年生として、内容ア「地域社会の現状や問題点を政治、経済、産業など、多面的、多角的な視点でとらえ、分析・判断し、自分たちでできることを考え実践しようとする。」の実現を目指したものである(資料編 大間々中学校内容系列表参照)。

(2) 学習活動の概要

生徒にとって意味ある問題解決活動として単元をとらえ、生徒に直接体験を通して大間々町の様々な立場の人々の切実な願いを生の声として集める活動を取り入れた。その結果、生徒にとって、身近で切実な問題としてとらえられるようにした。

また、大間々町の活性化を目指して実現可能な具体的なプロジェクトとして考えさせるために、商工会議所や役場の総務課・企画財政課、社会福祉協議会などの方々を招いての検討会を行った。

生徒の考え出した提案について、実際に経験する場を地域の方々と一緒に生み出すことによって、達成感や成就感をもてるようにした。

さらに、直接体験と地域との連携を重視するようにした。

具体的には、地域の人々と接して課題を見出すことにより、現実的な必要感をもてるようにする。また、調べる場合には、電話やメール、聞き取りなど、相手との対話のある活動を重視することで、人と接する過程での学びを経験できるようにする。検討会では、ゲストティーチャーに地域活性化のテーマに実際に取り組んでいる商工会の方や役場の企画財政課や総務課の方を招き、現場の立場での意見交換をしてもらうことを計画した。さらに、授業からの発展として、商工会主催のフリーマーケットに参加したり、空き教室を利用したお年寄りとの交流会を実施する。実施する際には、商工会や社会福祉協議会などとの連携を

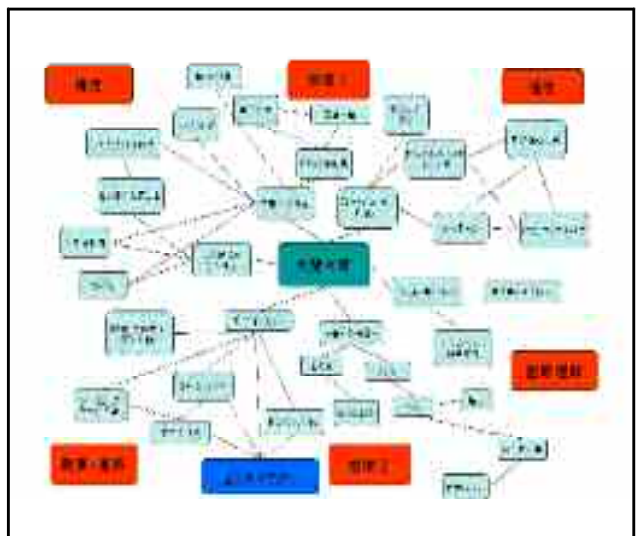
図り実施した。

(3) 単元の構想とウェビング

中学校3年「地域」の内容アについて、構想段階で、二つのウェビングを行った。

一つは、地域として「大間々町」を基に生徒の学ぶ道筋(学びの方向)を予測してみた。この中で、「だれにでも住みよい町作り」、「障害のある人と過ごす町」、「安全な町作り」、「歴史ある町」、「活気ある町作り」などが浮かんでくる。「町作り」つまり「大間々町活性化プロジェクト」への学びの方向が見えてきた(資料7 大間々町のウェビング参照)。

資料7 大間々町のウェビング



二つ目は、「町の活性化」を基にウェビングを行った。そして、この単元での生徒の学びの方向を検討してみた。「元気な町！大間々」、「よみがえれ！わたらせ渓谷鉄道」、「始めよう！福祉

資料8 町の活性化のウェビング



ボランティア」などの生徒が進むであろうプロジェクトの幾つかが想定できた（資料8を参照）。

2 地域素材の教材化

総合的な学習固有のねらいは「自己の生き方を考えることができる」である。生徒には、地域の内容を実現できる活動を通して、自己の生き方を考えられるような単元構成に心がけた。

生徒の暮らす大間々町の活気のない現状に視点を当て、一人の町民として暮らしやすい町作りを目指し、直接体験を通して町の活性化プロジェクトを考えさせることを目指した単元を考えることにした。

(1) 生徒の学びの履歴を生かす

生徒は、小学校から次のように学んでいる。

資料9 学びの履歴

学校・学年	内 容
五つの小学校	福祉体験学習 障害者との交流、車いすバスケット、高齢者施設との交流など 地域・伝統 古くからの遊びや食べ物、農業やかご作り、機織りなど 環境 オオムラサキの飼育など
中学校1年	福祉（主テーマ） ブラインドウォークや高齢者体験、車いす町探検などの体験学習 高齢者施設訪問、募金活動、町内清掃などのボランティア活動
中学校2年	進路・職業（主テーマ） 町で働く人々・職場・職業について学ぶ。職場体験を実施、職業と進路について考える。
中学校3年 1学期	地域（主テーマ） 大間々町役場の議会記録を基に大間々町の課題について考える。

このような学びを経験してきた生徒は、町の現状に気づき、活性化に向けての思考の基となる様々な経験を積み重ねてきていると考えられる。

そこで、中学3年生となり、政治や産業、経済などの視点から、より具体的で実行可能なプロジェクトを考え実践していく学習を取り入れることは有効であると考えた。

(2) 教師の願い

中学3年生になり、社会の状況についても学ぶことができるようになってきている生徒には、政治や経済、産業などの視点から、物事をとらえ、より現実的に考えてよりよい社会を築いていく力を高めていきたいと考えている。

近隣の町村との合併を控えている現在、大間々町の古き良き伝統や現在のよさや町の特長などに気づき、合併後も地域の特長を生かしていこうとする態度を育てていきたい。

(3) 大間々町を歩く

町の地域素材を考えるに当たり、まずは、ブレインストーミング法を用いて、思いつくままに項目をあげてみた。資料10はその一例である。

資料10 大間々町の史跡・名所



次に、大間々町教育委員会作成の小学校社会科副読本や大間々町史を持ち、大間々町を実際に確かめて歩いてみることにした。また、気付いたことを手帳（メモ）や音声記録装置（ボイスレコーダー）などに記録してみた。今までには、気が付かないことがたくさんあることに驚く。役場の総務課・企画財政課や商工会議所の方に実際に話を聞いてみることも有効であった。

町の活性化に直接結び付くものはなかったが、解決に向けての参考になるものに多く出会うことができた。

3 授業の実際

(1) 内容

中学校3年 地域 ア

地域社会の現状や問題点を政治、経済、産業など、多面的、多角的な視点でとらえ、分析・判断し、自分たちでできることを考え実践しようとする。

(2) 単元設定の理由

生徒の実態

本校では、1年時、「福祉」を主テーマに、福祉とそれにかかわる人々の取組について学び、自分たちでできることを考え行動できるようにしてきた。2年時は、進路と職業を主テーマに、職業と進路について考えるとともに、職場という視点から、大間々町を見つめることができた。また、今の自分のできることを将来を見通した視点で考え、行動するようになってきた。3年時の1学期は、町役場の議会記録を基に町の課題について学び、ほかの市町村の取組について調べる活動を行ってきた。

本単元では、町を学びの中心とし、生徒の町に関する関心や郷土を愛する気持ちを育てていく。大間々町の人々の意見や考えを実際に聞き、自分たちでできることを考え、地域の人々との検討会をもち、プロジェクトを実行していかこうとするねらいをもち「大間々町活性化プロジェクト」を取り入れることは、郷土を愛する気持ちを育て、よりよい町作りのために活動をしているといった実感をもたせるとともに、学びを深めていくのに有効であると考え。

・町についての学習を通して、町への興味・関心はもっている。しかし、商工会や役場、町内の人々が、どのように考えて生活しているのかという視点では、関心をもつものは少ない。また、社会の一員としての自覚をもって、政治経済などの視点から町の現状に関心をもち、積極的に生活していかこうとする意欲や態度は培われていない。(関心・意欲・態度)

・町の特長や問題点などについて、自分なりの考えや理解はあるが、それぞれについて、政治・経済・産業・伝統などの視点をもち客観的にとらえて考えることはできていない。(思考・判断)

・コンピュータを使った調べ学習やプレゼンテーションでは、小学校より経験があり進んで取り組むことができた。しかしながら、データを集積し、課題を分析するような活動の経験は少ない。必要な資料を集めたり、重要な事柄を分かりやすく伝えるような経験も少ない。(技能・表現)

・町の特長や問題点などについて、根拠を基に理解している生徒は少ない。町の人々がよりよい町作りについて考え行動していることについて、なかなか気付くことができない。(知識・理解)

教師の願い

自分たちをはぐくんだ郷土「大間々」について学ぶことを通して、郷土を愛する気持ちや感謝する気持ちをもって生活していけるようにしていきたい。また、自分たちも社会の一員として、郷土のためにできることを考え行動することを通して、自己の存在感や生きる充実感を学び、感じてほしいと考えている。

さらに、中学3年生になり、社会の状況についても学ぶことができるようになってきている生徒には、政治や経済、産業などの視点から、現実的に物事をとらえ、よりよい社会を築いていく力を高めていきたいと考えている。

また、来年3月には近隣の町村との合併を控えている現在、大間々町の古き良き伝統や現在のよさや町の特長などに気付き、合併後も地域の特長を生かしていかこうとする態度を育てていきたい。

(3) 単元の目標と評価規準

目 標	政治や経済、産業、伝統などの視点から大間々町の特長や問題点について調べる活動を通して、町を活性化するために自分たちでもできることはないかと考え、大間々町でよりよく生活できるようにする。			
評 価 規 準	関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
	政治・経済・産業・伝統などの視点から地域の現状をとらえ、現実的な視点で積極的に調べようとする。 地域の活性化に向けて意欲的に考え行動し、地域への発信活動や実践に積極的に取り組もうとする。	町の特長や問題点を調べる活動を通して、政治・経済・産業などの視点を基に客観的に解決に向けての新たな課題を見いだす。 全国の実践例や町のデータを分析し、町の特長を生かし、問題点を解決する方法を自分なりに考える。 自分たちで実現可能なプロジェクトであるかの判断をする。	課題解決に向けて、必要とする資料を収集し、活用することができる。 自分たちの課題解決の具体的な方法を分かりやすく伝えることができる。	地域の特長や問題点について理由を基に気付くことができる。 地域を支える活動の大切さや難しさ、それらに取り組む人々の思いや願いに気付くことができる。 町を支えるためには自分を含め、多くの仲間の理解と協力が必要であることを理解できる。

(4) 学習過程と評価計画

時間	学 習 活 動	支 援 (方法・内容)	評価規準				評 価 料
			関心意欲態度	思考判断	技能表現	知識理解	
1	1. 町の活性化という視点で大間々町の現状と課題について自分たちにできる方法を考え、学級ごとに調べる。 町の人々が望んでいることや課題として考えていることは何かを知るための方法を考える。	・前単元を参考にして、大間々町の人々の視点から課題を考えるようにする。 ・町の現状をとらえる方法として、インタビューやアンケート、電話聞き取り調査などの方法を考えられるようにする。 ・町の現状をとらえるためには、商店街の人、福祉にかかわる人、町のお年寄り、若い人などの対象と町の活性化という視点で福祉政策の現状と課題、大間々町の商店街の現状や課題、観光や町の特長などの項目を考え、調査の対象と項目を明確にできるようにする。 ・「～の人、百人に聞きました。」「～について百人に聞きました。」などのキャッチフレーズを用いて、生徒の興味を高める。 ・評価基準を事前に作成して生徒に示すことで、生徒の意欲を高めるとともに自己評価力を身に付けるようにする。 ・追究プリント1において、町の人々の意見を調べる方法が三つ以上考えることができないときは、今までの調査の方法を思い出せるようにする。また、全体での発表で気が付いたことを記入できるようにする。					追究プリント1
1	調査に向けて、計画を具体的に考える。 ・学級内で、前時で考えた調査対象・項目をあげ、協力して調べることができるように分担する。 ・調査対象によっては、事前に連絡をしておく。	・学級内で調査項目を分担し、全体で活用できるようにする。 ・調査対象によっては、事前の連絡が必要なことに気付くようにする。 ・具体的な計画では、目的、内容、対象、理由、時間、方法がしっかりととらえられるようにする。 ・目標をもち、具体的な計画を立てることができるよう、評価基準の視点を示して、目標をもちながら考えさせるようにする。 ・準備ができれば、連絡を取るようにし、時間がなければ休み時間や放課後を利用して連絡できるようにする。 ・追究プリント2において、計画がうまく立てられない生徒には、具体的な行動に視点を当てて話し合うようにして計画を明確にできるようにする。					追究プリント2
2	町の現状と課題を調べる。 ・自分の考えた対象と項目について、実際に調べる。	・前時で計画した調査方法で行うことができるように確認する。 ・昼休みに帰りの会を実施し、午後の活動時間を十分に確保する。 ・安全面や態度面に注意するようにする。 ・追究プリント3では100人を目標とするが50人の調査が終わらない場合は、放課後や土・日を使って調べることができるようにする。					追究プリント3
2	調査結果を基に大間々町の現状と課題をまとめる。 ・インタビューやアンケート結果を集計して、町の人々の願いや思いを明確にする。	・インタビューやアンケート結果を集計して、町の人々の願いや思いを焦点化できることに気付くようにする。 ・集計結果を分かりやすく伝えるように工夫できるようにする。 ・例示をすることで、短時間で効果的にまとめられるようにする。また、コンピュータや、模造紙や画用紙などを使ってまとめることができるようにする。 ・追究プリント4で町の人々の願いや思いに気が付けない場合は、調査の時の様子を振り返ったり、発表した内容の言葉に着目したりできるようにする。					発表資料 追究プリント4
1	調査結果を報告する。	・相手に分かりやすく伝えられるように、声の大きさや説明のポイントなどに注意するなどの工夫を考えて発表できるようにする。 ・追究プリント5においてうまく工夫ができない生徒には、各班の発表の工夫に注目して聞くことで自分の発表が工夫できるようにする。					追究プリント5

1	<p>2. 大間々町活性化プロジェクトを検討し、提案書を作成する。 調査結果の報告を基にして、自分たちにできるプロジェクトを考える。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・調査結果の報告を基に、大間々町の人々の願いや思いを焦点化して、それを解決するという視点で考えられるようにする。 ・政治や産業、経済などの視点からとらえることを確認する。 ・ブレインストーミング法やKJ法の手法を用いて、たくさんの解決法を考えられるようにする。 ・プロジェクトとして、自分たちで実現可能なことやだれに働きかけるのか、いつ、どこで何をするのかを明確にする。 ・ほかの市町村の取組なども参考にする。 ・追究プリント6につまずく生徒では、大間々町の特長や問題点を課題を焦点化して具体的な方法が考えられるようにする。 				追究プリント6
6	<p>近隣の市町村の取組やインターネットを使って同じような取組で成功している例を調べる。 ・市町村へのインタビューやアンケートなどを行う場合は、事前に連絡を取る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・調査計画をしっかりと立てるようにする。 ・調べ学習にかかわる関連機関へ事前に連絡を取るようになる。 ・追究プリント7につまずく生徒には、調べ方と調べた事柄を明確にできるよう、分かることと分からないことをはっきりさせるようにする。 				追究プリント7
6	<p>調査結果を基に町を活性化するプロジェクトを検討し計画を立てる(よみがえれ!わたらせ渓谷鉄道、町のクリーン作戦、町の伝統を残す活動、始めよう!福祉ボランティア、元気な町!大間々など)。 実現可能かどうかの検討を加え、現実的なプロジェクトにまとめる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・調べたことを基に、具体的なプロジェクトの内容を検討できるようにする。 ・町の特長や課題などの強みと弱みの分析を行い表にまとめる。 ・分析結果と町の人々の願いや自分たちの願いと照らし合わせることにより、より具体的なプロジェクトになるようにする。 ・実現可能かという視点で、プロジェクトを検討させて、より現実的なものとする。 ・追究プリント8でアイデアが浮かばない生徒には、ブレインストーミング法を取り入れるようにする。 ・プレゼンテーションの工夫がうまくできない生徒には、伝えたいことを明確にした絵本作りを事前準備として取り組ませ、相手に分かりやすく伝えることができるようにする。 				追究プリント8前半 追究プリント8後半
4	<p>3. 大間々町活性化プロジェクトの実行に向けて取り組む。 検討会を実施し、実践計画についてのプレゼンテーションを行い、多くの人に理解してもらえるようにする。 町の活性化にかかわる人々の話を基に検討会を振り返り気付いたことをまとめる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・商店街の人や福祉関係機関、役場、学校長などを迎えて、自分たちのプロジェクトをプレゼンテーションできるようにする。 ・検討会では、それぞれの立場で生徒のプロジェクトについて、実現可能かどうか、有効であるかどうかという視点で意見を述べてもらう。 ・プロジェクト報告書で、実現できるような具体的な方法が考えられない生徒には、資金や時間、場所などの具体的な視点を基に経済面、政治面について考えられるようにする。 ・振り返りカードがなかなか書けない生徒には、今までの活動やゲストティーチャーから学んだことを話し合せて気付けるようにする。 				プレゼンテーション資料 振り返りカード1
2	<p>検討会を基にして、プロジェクトの再検討を行う。 プロジェクトの最終報告を行う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・前時を参考にもう一度プロジェクトの見直しを行うことを知らせる。 ・よりよいプロジェクトになるように検討を加えた上で実行に向けて準備を行うようにする。 ・問題点や課題が出されたプロジェクトについては、対策や新たな方法を検討させて、課題の解決を図るようにする。 ・追究プリント9において、自分の新たな課題に気付けない生徒に対しては、経済面や地域への貢献度に着目して、自分のプロジェクトを検討できるようにする。 ・プロジェクト最終報告書で実現性が見られない生徒には、具体的な取組を意識しながら机上での話し合いを深めるようにする。 				追究プリント9 プロジェクト最終報告書
4	<p>広報活動や実践活動に取り組む。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・発表と行動を実際に行えるように環境を整える。 ・実際に活動を行い、自分の活動を振り返る。 ・振り返りカード2がなかなか書けない生徒には、今までのファイルを見直して自分の行動と気付きを再確認できるようにする。 				行動の様子 振り返りカード2

(5) 学習活動の実際

ア 課題をつかむ(1~7時間)

最初に、大きな課題として「大間々町活性化プロジェクト」を生徒に示した。生徒は、この単元としての課題をとらえることができた。

この大きな課題を解決するために、町の特長や問題点などの町の現状をつかむという課題(事実を認識するための課題)の解決に向かうことになる。

最初は、町の特長や問題点などの現状について、生徒一人一人に自分の考えを発表させた。その中で生徒は、今までの生活経験を基に町の特長や問題点を考え発表した。

その後、事実を認識するための課題を解決するために、「町の人々に町の特長や問題点、人々が望んでいることや課題としていること」を聞き取ろうと町内各地へ出て、町民への聞き取り調査を行った。生徒は各自で調査計画を立て、町内を一軒一軒歩いてまわったり、ショッピングモール内の買い物客や商店主のところへ行ったりして聞き取り調査を行うことができた(資料11・資料12)。

資料11 商店街にて

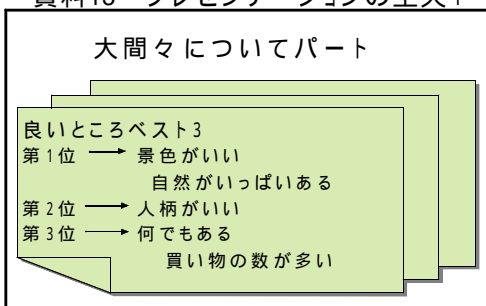


資料12 買い物客へ

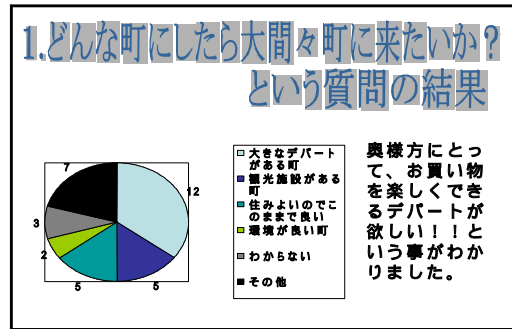


次に、聞き取り調査の結果を基に、各グループごとにプレゼンテーションの準備をした。生徒は、表やグラフの作成や「・・・のベスト3」などの分かりやすい工夫をすることができた(資料13・14)。統計処理する活動を通して、グラフを作成する力や必要な内容を絞り込む力が高まってきた(資14)。

資料13 プレゼンテーションの工夫1



資料14 プレゼンテーションの工夫2



町民の声を実際に聞き取り、調べた結果と自分たちの考えとを比較することで、新たに三つのことに気付くことができた。一つは、自分たちの知らない町の特長や問題点の発見である(資料13・14)。二つ目は、観光地の活性化や商店街の活性化といった「町の活性化」の手掛かりである(資料15・16)。三つ目は、町の短所である「大きな産業がない」という課題を解決することにより、町の長所である「自然」環境を壊してしまうという矛盾である。生徒は、自然と産業の共存に悩んだ(資料17)。事実を認識するために課題を解決することができたのである(以下の資料15~17は生徒の調査をプレゼンテーションにまとめたものである)。

資料15 町の活性化の手懸かり1

活性化についての集計結果

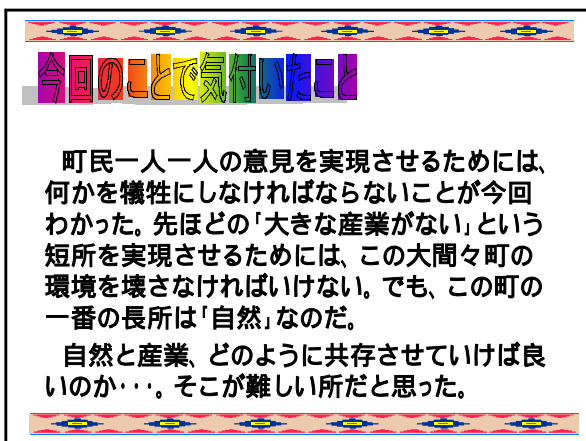
- バスを増やした方が良い
- ビシビシ教育をする
- お年寄りの遊ぶところがあると良い
- 商店街の活性化
- 観光客を呼ぶための施設
- ながめを活性化させる

資料16 町の活性化の手懸かり2



大間々町は、自然やながめなどの観光地があつてとてもキレイです 人々も優しいところです しかし、交通機関のおくれや商店街に活気がなくなってきていて、せっかくのキレイな町なのに明るさがなくなってきている。なので、まずは大間々町に活気があれば自然と人が集まってもっともっと明るい良い町になると思っています(> . .)v

資料17 自然と産業との共存への気付き



生徒は、町の特長や問題点から町の現状を知り、町の活性化への手懸かりと新たな課題をしっかりとつかむことができた。

いよいよ「大間々町活性化プロジェクト」という大きな課題の解決に向かうのである。

「町の活性化」として、自然を生かしながら産業を活発にすることはできないかと考え始めた。そして、観光地の活性化と商店街の活性化に向け、「自分たちにもできそうことはないだろうか。」「自分でこんなことをやってみたい。」という具体的な考えに進んでいた。まさに「生き方を考えるような課題」へと発展をしていったのである。

学習を進めていくと、町の特長や問題点が教師が事前に考えた「大間々町のウェビング」(資料8)に非常に近い内容になってきたことに気付いた。教師間にも安心して取り組んでいけるという気持ちが生まれた。

イ 課題を解決する方法を考える(8~20時間)

町民への聞き取り調査から「町の活性化への手懸かり」と自然と産業の共存という「新たな課題」をつかんで、生徒は、「大間々町活性化プロジェクト」に取り組むことになった。

最初に自分たちの発想を生かして、町の活性化に向けての方法を考えるようにした。ここでは、ブレインストーミング法やKJ法を用いて考えを整理してまとめるようにした(資料18)。

また、生徒の考えだけでは不十分なところを、参考資料として全国各地の成功例を紹介することで補った。資料を活用する場合は、内容をまねるのではなく、それぞれのアイデアを参考にして、町にあったプロジェクトを考えられるようにした。

参考資料として、国土交通省の観光政策のホー

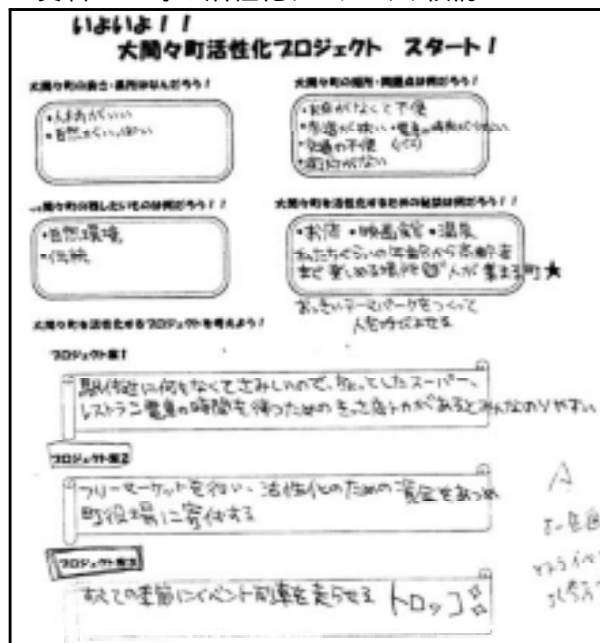
ムページの観光カリスマ百選 (<http://www.mlit.go.jp/sogoseisaku/kanko/top.htm>) 全日本町おこし研究所(まちけん.net) (<http://www.machi-ken.net/>) のWebページを各クラス分を印刷しておいた。観光カリスマ百選では、問い合わせ先と担当者が示されている。

本校では、チャレンジウイークとして、3年生では、10月18・19・20日にまとめて16時間の総合的な学習の時間を設定し、プロジェクトの計画を立てていった。

生徒は、自分の考えと参考資料を基に、町の活性化に向けての数々のプロジェクトを考え始めた。資料を基に兵庫県に電話をかけて内容を聞いたり、町内に出かけて調べたりと様々な経験を通して、人と人のつながりに気付いていった。そして、「商店街の活性化」、「わたらせ渓谷鉄道の活性化」、「祭り・行事の活性化」、「観光地の活性化」、「町の活性化」の5分野、全体で33のプロジェクトが考え出された。資料19はその一部である。

課題を解決する方法を考える場面においても、事前に教師側で行った、「町の活性化のウェビング」(資料8)と同じような内容となった。ウェビングの単元を構成するための有効性が感じられた。また、「観光カリスマ百選」、「全日本町おこし研究所」の資料は、授業の中で生徒の学びの方向をとらえて指導したり、なかなか課題の解決に向かうことのできない生徒へ助言したりするのに有効であった。

資料18 町の活性化プロジェクト検討



資料19 プロジェクト一覧

大間々中学校
総合的な学習の時間（3年）
プロジェクト一覧（1）

商店街の活性化

1. 商店街の活性化
2. 和洋菓子作り体験教室
3. 空き店舗を利用して、お年寄りのための憩いの場を造ろう。
4. フリーマーケットで町の活性化と募金
5. 大間々町のいい所

わたらせ渓谷鉄道の活性化

1. 大間々町の特産物で駅弁を作ろう！
2. すべての季節にイベント列車を企画

祭り・行事の活性化

1. 大間々町の伝統行事を場やそう
2. 大間々祭りを残すために・・・
3. 町民が参加できる新たなイベントを考えよう
4. 人が集まる秋祭り、町民マラソンを企画する。
5. 人をたくさん集めることができる楽しいLIVEを催そう！！

観光地の活性化

1. 大間々町観光地宣伝プロジェクト
2. 大間々町の四季の魅力！

町の活性化

1. 図書館を中心とした町の活性化
2. 公園ピカピカ運動
3. 子供が安心して遊べる公園を作る
4. 不法投棄をなくし、清潔できれいな町にしよう！

しかしながら、生徒の考えた解決方法には、まだまだ不十分な部分がある。内容にあるような「政治、経済、産業など、多面的、多角的な視点」では、なかなか考えることができない。

そこで、生徒の学びの活動を深めるために町の活性化について実際に取り組んでいる町の企画財政課と総務課、商工会の方々をゲストティーチャーに招き、検討会を行うようにした（資料20）。

資料20 検討会の様子



事前の打合せでは、実践することを前提として、政治・経済・産業などの視点から問題点や課題を専門的な立場で指導助言していただくようにした。

検討会を通して町や商工会の実際の活動における予算や経済の仕組みについて学ぶことができた。大間々祭りにかかる費用や行事によって生み出される経済効果、材料費と商品の値段の関係など具体的な視点で意見や助言をしていただいた。それぞれのプロジェクトで、手続や予算や場所、宣伝をどのようにしていくかなど具体的な質問や指導を受けることができた。生徒たちには、それぞれに新しい視点での気づきが生まれた（資料21・22）。

「大間々町活性化プロジェクト」に新たな視点が加わり、生徒は自分の考えたプロジェクトを見

資料21 振り返りカードから

アロックスをはじめたときは大間々の活性化なんて簡単だと思ってやってた。でも調べたりグロテスターの話を聞いて自分たちが考えていたようなもんじゃなく、お金、人集めや場所などおとろく見つかるとはわかんなくて一つのプロジェクトをやるにも難しいんだと感じさせられました。今後グロテスターや先生などがやってたことをもとに大間々の活性化についてもう少しマシXに取り組み大間々を自分たちの力で少しでもよくしていけたらいいと思います。役場の人ももろくを願ってほしいと思うがさ...

資料22 振り返りカードから

やっぱり、自分達が考えていることで、役場の人（グロテスター）が考えていることは一歩はズレがあった。でもグロテスターは私たちより現実的で、あまり考えていなかった。予算やマシ、商工会の資金のついでなどに多くを教えてくれました。こんなことから、やはり、町を変えて活気の良い町をつくるのはとても難しい。マシが分かれます。夢の話を話せば、2割しか決まっていなくて、赤字だも言っていました。こんなことから、簡単に町の活性化は決められない。資金もとてもよく考え、絶対にうまくいかなく、よく話し合えていかなければ決められないことが分かりました。

直して、より実現に向けた課題を解決することになる。

ウ 課題を解決する（21～30時間）

検討会での指導・助言を基にして、それぞれのプロジェクトをもう一度見直していく。生徒は、検討会を通して、町役場や商工会からの協力を得て、積極的に活動を始めた。予算や手続に問題があれば、町役場や商工会などに問い合わせた。「ながめ余興場」を使うための手続や費用を生徒が直接聞き出した。また、町の名物になるまんじゅうの作り方教室を開くためにまんじゅうを作っている商店に問い合わせた。図書館の部屋を借りてのカルチャー教室を開くための交渉を始める生徒もいた。商工会主催のフリーマーケットへも自主参

加を決め、全体へ呼びかけ始めた。ほかにも、生徒が考えたプロジェクトと同じような考えの活動もあり、自分たちが参加できるものがないかを調べていった。そして、商店街の活性化や観光地の活性化では、実際の調査が行われていった。

最後に、プロジェクトを客観的にとらえさせ、提言とするか、学校内で仮実施するか、実際に実施するかの判断をさせた。実施も行事などに参加、学校のホームページに掲載、町内に展示するなどの具体的な取組を考えた。「大間々町活性化プロジェクト」という大きな課題は次第に解決し始めた。

生徒は、授業が進むにつれて積極的に活動するようになり、土曜日や日曜日に町内の行事に参加したり、学校内に来て準備をするなど進んで取り組む姿が見られるようになった。

生徒は、学校の授業を飛び出して、自分にできることを考え行動し、自分の生き方にも目を向けるようになってきた(資料23・24)。

資料23の生徒は、聞き取り調査の体験を基に町の長所や伝統に気付くことができた。そして、プロジェクトの作成に向けて活動することを通して、自らが積極的に行動することに気付いた。また、プロジェクト発表を通して、充実感や達成感をもつことができた。

そして、これからも大間々町を大切にしていこうと考えるようになった。

資料18の生徒は、プロジェクトの実施に向けて、町内を調査し、活性化する方法を考えていった。その過程を通して、商店街の人々と触れ合い、町の人への優しさに気付くようになった。そして、伝統ある商店や古き良き町並みに出会い、次第に町への愛着を深めていた。

最後には、自分たちから積極的に商店街との触れ合いを深めていくことで町の活性化を進めていこうと考えるようになってきた。

以下は、プロジェクトの実践の一部である。

「フリーマーケットで町の活性化と募金」のプロジェクトでは、学校長に許可を取り、校内にポスターを作成してフリーマーケットの出品物を募集したり、校内に協力者を



資料25 フリーマーケット

資料23 振り返りカード2から

最初、「100人にインタビューしよう」と聞かされたとき、すごくびっくりしました。でも、みんな力を合わせてたくさんの人に、大間々町のよい所、残しておきたい伝統などを聞くことができました。そして、町民の意見をもとにプロジェクトを考え、しんげんに取材取材しました。自分の町を活性化させよう!!というテーマは楽しかったです。実際に実現したらすばらしい町になると思います。私は大間々町の活性化を考えたい所々に電話したり、会いに行ったり自分から積極的に行動することができました。これからも、大間々町を大切にして、活性化についても考えていきたいです。

資料24 振り返りカード2から

最初は町の活性化は大間々町の活性化についてそれぞれの商店街の目玉商品をインタビューして調べました。商店街の人たちととてもやさしく話しそのお店の良い所が見つかることができました。これからも町民たちの町を活性化を明るく有名にさせてお客さんが来るように会えることも、と良く会えるように考えてもみました。そして、商店街とのふれあいを深めていきたいと思います。そして商店街は、いい所がいっぱいあります。そして、伝統のあるお店があって見るとは、とてびっくりです。そして、町民さんたちからこのままのままでいいと思います。これからも大間々町のよいところを商店街をくまなくしらべていきたいです。

募ったり、商工会の主催するイベントにフリーマーケット出店の交渉を行ったりした。そして、実際に11月12・13日に商工会主催のフリーマーケットに参加することになった(資料19参照)。

また、「公園をきれいにしよう」のグループは、フリーマーケットと一緒に参加して、ペンキ代などの必要経費を得ることができた。

「わたらせ渓谷鉄道夢切符の売上げ向上」のグループは、フリーマーケット会場にパンフレットやポスターなどを掲示して宣伝を行った。

ゲストティーチャーとしてきた商工会の方々の協力を得て、実践することができた。

「大間々TownでHalloween」のプロジェクトでは、大間々町に新しい行事の提案を進めるものである。

しかし、町内では難しいということで、学校長に許可を取り、校内でHalloweenパーティーを実施した。日曜日にALTも一緒に準備をしていた。そして、全校生徒にアンケートを実施して感想を取りまとめた（資料26）。

資料26 ハロウィンの様子



「図書館を中心とした町の活性化」（お年寄りから子供まで人が集まる行事〔カルチャー教室〕を開き、人を集める）

と「空き店舗を利用して、お年寄りのための憩いの場をつくろう」では、図書館や空き店舗で実施する前に試験的に空き

資料27 寿会との交流



教室に寿会の方々を招いた。カルチャー教室では、囲碁や将棋をお年寄りと生徒と一緒にやった。

憩いの場では、手作り菓子を食べたり、昔の遊びをしながら数時間を過ごしていた。この活動は、土曜日のマラソン大会の午後の時間を利用したものである。社会福祉協議会や寿会の方々との協力を得ることで実現した（資料27）。

4 成果と課題

（成果）

内容系列表を基にすることで、本単元の内容が明確になり、「政治・経済の面から地域を学ぶ」ことができるようになり、内容の深まりができた。

単元の開発のために2度のウェビングを行ったことで、単元での学習の方向性が明確になった。

この単元では、内容アについて学習を進めてきたが、学習を通して、内容イについても生徒

は学ぶことができた。一つの単元で、二つの内容を学ぶことができた。

評価の視点を4観点にすることで、生徒の学ぶ姿を教科と同じようにとらえることができるようになり、評価規準も明確にすることができた。

商工会や寿会、役場の方々とのかかわりが深まり、学習の取組を理解していただき協力を得ることができた。

課題をつかむ過程で町民への聞き取り調査を取り入れたことで、町についての再認識や新しい発見を生むことができた。インターネットや資料では、どこか人ごとであった生徒が、自分のこととしてとらえることができた。

課題を解決する方法を考える過程では、大間々町の活性化に直接携わっている方をゲストティーチャーに迎えることで、現場での課題やコスト面などを含めた指導・助言があり、より現実的なプロジェクトになった。

各学習の段階ごとに直接体験を経験することで、課題が「目当てのレベル」から「事実認識のレベル」そして、「生き方を考えるような課題」へと変わり、生徒も「したい！やらなくては！」という意欲が強くなった。また、実際にプロジェクトを実施する中で、自分の取組に成就感・充実感をもって活動できるようになってきた。

（課題）

生徒が実際に活動する場合に、施設や企業、商店などに事前連絡の必要があり、幾つかの苦情も寄せられた。年度当初に、1年間の活動に対する許可や依頼を行い、いつでも自由に生徒が活動できるような工夫が必要である。

地域の方々との連絡を綿密に取り、地域の方の協力を得られるようにしていく必要がある。

調査結果をデータ化したり、データから必要なものを読み取ったりすることが、生徒には難しいようであった。データ処理から分析までを社会科や数学科との連携を深めながら学べるように、各教科との連携を計画する必要がある。

プロジェクトの実施については、今回は3年生の2学期ということで比較的土・日曜日を利用することができたが、部活動や受験勉強などを考えると活動する時間の確保が必要になる。

生徒の活動を支援する体制を職員が一体になり作り上げていく必要がある。

成果と課題

1 成果

内容系列表を作成し、それを基にすることで、単元の内容が明確になり、目標や評価規準を設定することが容易になった。

単元を構成する際に、ウェビングを行うことで、児童生徒の様々な活動の広がりや深まりを想定することができ、それに応じた指導や支援が可能になる。

総合的な学習固有のねらいである「自己の生き方を考えることができる児童生徒の育成」には、地域素材を有効に教材化することが必要不可欠であるということが分かった。

4観点による評価は、教科と同様の評価が可能となり、児童生徒の活動をより具体的に見取ることができるようになり、指導と評価の一体化を図る上で効果的であった。評価規準を設定することができれば、さらに児童生徒一人一人をきめ細かく評価できるようになり、一層効果的である。

内容系列表を小学校3年生から中学校3年生までを見通して作成することができれば、小学校では地域に愛着をもった児童を育成し、中学校では地域に積極的に働きかける生徒を育成するということに、系統的、発展的な指導が可能となる。

2 課題

内容系列表は、その学校の基準として総合的な学習の時間の内容や目標を示すものであるため、全職員で作成することが望ましい。そして、適宜、更新していくことが必要である。

単元を構成する際は、様々な視点からウェビングを行うことが大切であり、そのための時間の確保が必要となる。

児童生徒の学びの変化に素早く対応し、教師が基準を設定し直す時間を確保したり、グループ活動が進む中で一人一人を正確に評価するために、振り返りカードの内容を工夫したりすることなどが、今後の課題である。

主な参考文献

- ・高浦 勝義 編著 『総合学習の理論』 黎明書房(1997)
- ・加藤 幸次 編著 『総合学習の実践』

黎明書房(1997)

- ・高浦 勝義 著 『総合学習の理論・実践・評価』 黎明書房(1998)

・高浦 勝義 編著 『中学校 総合的な学習の時間23例』 大日本図書(1998)

- ・高階 玲治 著 『総合的な学習を総点検する(総合的な学習の開拓 26)』 明治図書(2001)

・奈須 正裕 著 『学校を変える教師の発想と実践』 金子書房(2002)

- ・嶋野 道弘 著 『育て！子どもの学ぶ力』 全国学校給食協会(2003)

・高浦 勝義 著 『絶対評価とルーブリックの理論と実際』 黎明書房(2004)

- ・『総合的な学習の時間の授業と評価の工夫

- 評価規準及び評価基準を介した指導の改善、自己学習力の向上及び外部への説明責任に向けて(第三次・最終報告書) - 国立教育政策研究所(2005)

・『総合的な学習の時間実践事例集』 国立教育政策研究所教育課程研究センター(2002)

- ・学校の経営34～37 群馬県総合教育センター

(担当指導主事 浅見 一秋)

第2章 新学習指導要領のねらいの一層の実現を図るための具体的な課題等

3 「総合的な学習の時間」の一層の充実

(1) 現状と課題

「総合的な学習の時間」の現状と実施上の課題等

各学校では、平成14年度から本格実施となった「総合的な学習の時間」について、その趣旨に即し、ながら創意工夫しながら実践に取り組んでいるところである。教員・保護者・児童生徒に対する意識調査等からは、創意工夫した授業計画の組立ての機会が増加し、児童生徒の自ら調べ・まとめ・発表する力、思考力・判断力・表現力、学び方や近年とみにその低下が指摘されている学習意欲の向上などにつながったなどの肯定的な声が多い。一方、教員の負担感、学習のテーマ設定の難しさ、具体的な実施内容に関する教員の悩みなどを考慮し、何らかの参考となる手引が必要であるとの指摘もある。

また、各学校の「総合的な学習の時間」の取組について様々な課題も指摘されている。例えば、「総合的な学習の時間」の「目標」や「内容」は、各教科等と異なり学習指導要領に示されておらず、各学校においては、学習指導要領に示された「総合的な学習の時間」の趣旨及びねらいを踏まえ、具体的にこれを定めて計画的に指導を行うことが求められる。しかしながら、学校において具体的な「内容」や「目標」を明確に設定せずに活動を実施し、必要な力が児童生徒に身に付いたか否かの検証・評価が十分に行われていない実態や、教科との関連に十分配慮していない実態、教科の時間への転用なども指摘されているところである。このほか、児童生徒の主体性や興味・関心を重視する余り、教員が児童生徒に対して必要かつ適切な指導を実施せず、教育的な効果が十分上がっていない取組も指摘されているなど、改善すべき課題が少なくない状況にある。

さらに、「総合的な学習の時間」については「時間」であるという名称から、教科等とともに教育課程を構成するものであると受け止められにくく、計画的な指導の必要性が理解されにくくなっているとも指摘されている。

表「総合的な学習の時間」の充実や改善に関する学校課題（複数回答）

充実や改善に向けた学校課題		小学校(%)		中学校(%)	
学 習 内 容	発達段階や学年の系統性からの見直し	2.0	6.5	2.3	6.3
	教科等との関連を図る	1.8		1.3	
	課題やテーマの見直し、活動内容の充実	2.0		2.0	
	体験的な活動の見直しや充実	7		7	
指 導	指導・支援の内容や方法の工夫、改善	3.4	6.1	2.7	5.1
	指導体制の工夫（担当人員、外部講師との連携）	2.5		1.7	
	学習したことを生かす場の工夫	2		7	
年 間 計 画	単元の開発	2	3.6	3	3.3
	年間計画の改善、単元の配列	2.5		1.3	
	配当時数、時間の設定、時間割の工夫	9		1.7	
評 価	評価規準の作成、評価方法の工夫	2.0	2.2	2.0	3.3
	評価の活用（意欲の向上、指導の改善に生かす）	2		1.3	
協働体制（情報交換や共通理解の時間、教師の意識改革）		2.3			
学 習 環 境	資料の整備、活用の工夫	7	2.5	0	1.6
	教材、教具や情報機器の充実	5		1.3	
	安全対策（校外活動での安全確保）	1.1		0	
	交通手段、費用、移動時間	2		3	
地 域 と の 連 携	人材や素材の活用、体験の場の確保、	1.1	1.6	1.3	1.6
	説明責任	5		3	
学校としての目標の見直し		5		3	

注：表中の数字は、記述のあった学校数の割合（%）を表す。

「総合的な学習の時間」内容系列表（群馬県総合教育センター試案）

領域	領域の目標	領域の内容	各 学 年 の 内 容			
			小学校3・4年	小学校5・6年	中学校1・2年	中学校3年以上
国際理解	人と人との相互理解・相互交流を基本に国際化の進展に対処することができるように、日本や世界の国々の歴史や文化に関心をもち、異文化を尊重し、国際社会の一員として共に生きていくことのできる資質や能力を育てる。	ア 異文化理解及び異文化尊重の態度 イ 共生（国際交流・協調） ウ 地域や自国の歴史や伝統文化等の理解及び自己の確立 エ 外国語によるコミュニケーション	ア 世界の様々な国の歴史や文化に進んで親しみ、それぞれのよさに気付く。 イ 様々な国の人々と交流し、だれでも仲良く助け合おうとすることができる。 ウ 郷土の文化や先人の偉業、歴史について調べ、興味・関心をもつ。 エ 外国語に興味・関心をもち、歌や言葉を親しむ。	ア 世界の様々な国の歴史や文化について理解を深め、視野を広げる。 イ 様々な国の人々と交流し、それぞれの国のよさを尊重するとともに、大切にしようとする。 ウ 日本の歴史や伝統・文化について学び、大切にしようとする。 エ 外国語に興味・関心をもち、簡単な日常会話に慣れ親しむ。	ア 他国の歴史や文化への関心を高めるとともに、そこに見られる共通性や差異を理解し、尊重しようとする。 イ 異なる立場や考えの人、外国人などと協調し活動しようとする。 ウ 自国のよさを見つめ、日本人としての自覚をもち、自己のあり方を考えようとする。 エ 外国語によるコミュニケーションを積極的に図る。	ア 他国の歴史や文化、伝統を包括的・体系的に理解し尊重しようとする。 イ 様々な国の人々と積極的に交流し、国際親善に努めようとする。 ウ 国際社会の一員として、日本や日本人の役割について考えようとする。 エ 外国語で意思の疎通ができるようになる。
情報	様々な学習や生活との関連において、多くの情報の中から自分に必要な情報を収集・選択し活用することができ、情報の積極的かつ責任ある発信ができる資質や能力を育てる。	ア 情報収集と活用 イ 責任ある情報の発信	ア 課題意識をもって、必要な情報を収集・選択し、生活に役立てようとする。 イ 相手の気持ちを考えた情報発信ができる。	ア 多様な情報源を用いて、目的に応じた適切な情報を収集・選択・整理し、生活に生かすことができる。 イ 受け手の願いや状況、メディアの特性などを考慮し、責任ある情報の発信ができる。	ア 課題や目的に応じて情報手段を適切に活用し、必要な情報を収集・選択・整理・処理し、生活に生かすことができる。 イ 社会生活の中で情報や情報技術が果たしている役割や及ぼす影響を理解するとともに受け手の状況を踏まえ責任ある情報の発信ができる。	ア 課題や目的に応じて情報手段を適切に活用し、収集・選択した情報を判断し、分析するとともに生活に生かすことができる。 イ 社会生活の中で情報や情報技術が果たしている役割や及ぼす影響を理解し、情報モラルの必要性や情報に対する責任について考え、望ましい情報社会の創造に参画しようとする。
環境	身近な自然に積極的にかかわり、自然のもつ豊かさや大切さに気付き、生活と環境のかかわりについて理解を深め、自然と共生し、自分ができる方法での環境保全やよりよい環境を創造する資質や能力を育てる。	ア 自然に対する感受性や環境への関心 イ 環境問題と生活様式とのかかわりについての理解 ウ 環境保全やよりよい環境創造のために、主体的に行動する実践的態度	ア 様々な体験活動を通して、身近な自然に親しみ、自然の大切さに気付く。 イ 身近な環境問題を知り、それは自分たちの生活と深くかかわりがあることが分かる。 ウ 環境問題の解決や環境の保全、よりよい環境の創造を目指す地域の人々の気持ちや取組、関係機関の取組などを知り、自分にもできる方法で実践しようとしている。	ア 自然に対する豊かな感受性や環境に対する関心を高め、自然を大切にしようとする。 イ 環境問題の現状について、科学的な方法を用いてとらえるとともに、自分たちの生活とのかかわりについて考える。 ウ 環境問題の解決やよりよい環境創造を目指す取組が抱える構造的な問題について認識を深め、その上で、自分たちの生き方を振り返り、日常実践に移すことができる。	ア 多様な視点や論理で地球規模の自然を見直し、自然保護に必要な生活の在り方を考える。 イ 生産・流通・消費といった人間の生活の営みが、様々な面で環境に影響を及ぼしていることを理解する。 ウ よりよい環境創造、経済活動や生活様式の変化など多面的な視点から環境問題をとらえ、自分ができることを考えたり、実践したりする。	ア 地域規模、地球的規模の環境問題、自然破壊等を多様な視点から科学的に分析し、産業と自然や環境とのあるべき姿を考える。 イ 人間と環境との関連性を幅広くとらえる中で矛盾を見だし、人間の責任や役割について理解し、よりよい自然との共生について考える。 ウ 環境問題の解決やよりよい環境の創造のための取組の裏にある諸矛盾に気付き、将来にわたって考えていかなければならないことは何かを考え、自分なりの日常実践を行う。
福祉	自分を含め、様々な人々がそれぞれに生きがいをもって生きようとしていること、そのためにお互いに助け合っていることを理解し、より一層充実した福祉社会の実現に貢献する資質や能力を育てる。	ア 他者への尊重・尊敬・思いやりなどの豊かな人間性 イ 福祉にかかわる社会の特質・問題の理解と、看護・福祉などの課題についての認識 ウ よりよい福祉社会実現のために、主体的に行動する実践的態度	ア 身近にいる高齢者、年少者、障害者などのかかわりながら、それぞれの人の存在の大切さに気付き、温かい気持ちで接する。 イ 様々な人々の置かれている社会的状況を知るとともに、身近なところに配慮や工夫があることが分かる。 ウ 身近な福祉問題の解決の方法やみんなが幸せに暮らせる社会について考え、自分にもできることを実践する。	ア 様々な人々とのかかわりを通して人は生きがいをもって生きていることや互いに助け合っていることを理解し、他者を尊重し、思いやりをもって接する。 イ 日々の生活は人々の支えや助けによって成り立っていることや福祉社会の現状や問題点を知り、福祉に対する認識を深める。 ウ みんなが生き生きと充実した生活を送ることができる福祉社会とはどんなものかを考え、福祉問題の解決やより充実した福祉社会を実現するために自分ができる活動を進んで実践しようとする。	ア 地域の人々との交流や体験活動を通して、高齢者や障害者などを正しく認識するとともに、互いの違いや個性を認め合い、尊重し、思いやりをもって接する。 イ 高齢者や障害者などの置かれている現実など現代社会の福祉にかかわる現状や問題点をとらえ、ボランティア活動などの体験を通して福祉に対する認識を深める。 ウ 身近な福祉問題の解決やよりよい福祉社会実現への様々な取組やそれに携わる人々の気持ちや考えを知り、自分ができることを発信したり、実践したりする。	ア だれもが障害を持つ可能性があり、高齢者になることを前提に、高齢者や障害のある人々は特別な存在ではないし、その人格が尊ばれ、一般の社会の中に普通に参加し、平等に生きる権利があることを認識する。 イ ボランティア活動などを通して様々な福祉にかかわる問題を認識し福祉政策や社会的サービスが対等の生活原理であることが分かる。 ウ 福祉にかかわる諸問題について、日本と諸外国の取組との比較したり、福祉政策の問題点について分析したりして、考えをまとめ、提言として発信していく。
生命・健康	生命のすばらしさや尊さに気付き、自他の生命を尊重する心をもったり、心身ともに健康で安全な生活を営んだりすることができる資質や能力を育てる。	ア 生命を尊重し、大切にしようとする態度 イ 健康で安全な生活についての理解及び実践する能力や態度	ア 動植物の生態や生育環境に関心をもったり、自分の成長を振り返ったりする活動を通して、生命のすばらしさや大切さに気付き、生命を大切にすることができるようにする。 イ 健康で安全な生活を送るために必要な基本的な生活習慣の大切さに気付き、自分の生活を振り返りよりよい習慣や態度を身に付けようとする。	ア 生命誕生の神秘を知り、自分自身の命が周りの人々とのかかわりの中で生まれはぐくまれてきた尊いものであることを実感し、すべての生命を慈しみ、尊重しようとする心をもつ。 イ 自分たちの生活の現状から病気やけがの予防、健康増進のメカニズムを理解し、自分の生活を見直し、よりよい生活習慣を創造することができるようにする。	ア 自分自身の生命をはじめ、身の回りの様々な生命が互いに関係し合い生かされていることに気付き、生命の尊さや自他の生命を尊重しようとする心をもつ。 イ 健康で安全な生活を送るために運動・栄養・睡眠・食事などの多面的な視点から自分の生活を見直し、科学的な追究を基によりよい生活環境を創造することができるようにする。	ア 生命について自然科学・社会科学・倫理等の面から考えたり、過去と現代人の考え方を比較したりしながら、自他の生命に対するとらえ方を振り返り、生命を尊重しようとする心をもつ。 イ 健康で安全な生活を送るためにエイズなどの感染予防についての基礎的な知識をもつとともに、そこには偏見や差別が存在することを人権や道徳の面からとらえるようになる。
地域	自分たちが暮らしている地域に愛着をもち、家庭や学校を含めた地域の生活上の諸問題について理解を深め、自他を尊重しつつ、地域社会の一員としてよりよい民主的な生活の実現に意欲的、協力的に取り組もうとする資質や能力を育てる。	ア 地域の伝統・文化・行事・生活習慣・政治・経済・産業などの現状や問題点の理解 イ 地域や学校等の行事や活動、生活上の問題等の解決に向けて自他を尊重して協力的に取り組もうとする態度	ア 地域探検や地域を支える人々との交流を通して、地域の人々の思いや願いを知るとともに、地域への関心や愛着をもつ。 イ 地域社会の一員として、地域の生活や文化等を守り、受け継ぐとともに、よりよい郷土をつくるために自分たちができることを考え、取り組む。	ア 地域の伝統、文化、歴史、産業などの特色、それらを支える人々の存在や取組を知ることを通して、郷土への愛着を深める。 イ 地域社会の一員としての自覚をもち、地域の抱える問題点を理解した上で、自分たちの地域での生活や文化を守り、発展させていくための方法を考え、取り組む。	ア 地域や生活上の問題について地域の専門家や様々な立場の人の意見を聞いたり、客観的、科学的にとらえたりして解決の方向性を探る。 イ 地域社会を構成する一員としての自覚と誇りをもち、他（た）と協力してよりよい郷土の創造を目指した取組を行う。	ア 地域社会の現状や問題点を政治、経済、産業等、多面的、多角的な視点からとらえ分析・判断し、解決しようとする。 イ 地域社会を構成する一員としての自覚と誇りをもち、自他を尊重しつつ、よりよい社会の実現を目指して、その発展に尽くそうとする。
進路	それぞれの職業の大切さや労働の意義について理解するとともに、自己の適性や将来について考え、個性豊かによりよく生きていくことのできる資質や能力を育てる。	ア 具体的な活動や体験を通しての職業観・労働観の拡充 イ 自己の価値観の確立	ア 家庭や学校、地域での仕事に触れ、それらが自分たちの生活を支えていることを知り、働くことの大切さに気付く。 イ 身近な人々の様々な姿や職業に対する思いや気概に触れ、その生き方に関心をもち、自分の姿を見つめる。	ア 職業調べや職場見学、地域の人とともに働くことなどを通して、働くことの喜びや苦勞、それぞれの職業の大切さを実感する。 イ 自己の適性や将来について考え、なりたい自分に向かって、自己をより高めていこうとする。	ア 職業調べや職場体験を通して、働くことの喜びや厳しさ、働く人たちの仕事に対する思いや責任感にふれ、労働の意義について考える。 イ 自己の適性や将来の職業選択を視野に入れ、自己を高めていくために何が必要か考え、取り組もうとする。	ア 職業調べや職場体験等を通して、職業には性差や制度による様々な問題点のあることを科学的に理解し、自己の職業観を振り返る。 イ 現在や将来を真剣に考え、様々な社会参加の在り方や生き方の選択肢があること、生きがいをもって充実した人生を送ることの意味等を考える。

領域	領域の目標	領域の内容	各学年の内容		
			中学校1年	中学校2年	中学校3年
福祉	高齢者や障害者を含めた社会の一人一人が自立しつつ、年齢や性別にかかわらず、お互いに助け合いながら、多様な価値観に基づく自己実現を図ったり、心の豊かさを実感しつつ、生きがいをもって生きていける社会の実現に取り組もうとする資質や能力を育てること	ア 他者を尊重する態度や尊敬する気持ち、他人を思いやる気持ちなどの豊かな人間性を育てること イ 高齢化社会の特質や問題点などについての理解を深め、介護や福祉の問題などについての考えを深めること ウ よりよい福祉社会実現に向けて進んで行動する態度を育てること	ア (ア) 地域の人々との交流や体験活動を通して、高齢者や障害者などを正しく理解することができる。 (イ) お互いを認め合い、年少者や障害者を尊重する態度や高齢者を尊敬する気持ち、相手を思いやる気持ちをもって生活することができる。 イ (ア) 高齢者や障害者などの理解を通して、現代社会の福祉に関わる現状と問題点についてとらえることができる。 (イ) ボランティア活動等の体験を通して福祉に対する認識を深めることができる。 ウ 地域の人々との交流やボランティア活動などの体験活動を通して学んだことを生かして、身近な福祉問題で解決できることやよりよい福祉社会の実現に向けて自分にできることを考えて実践する。	ア だれもが障害をもつ可能性があり、高齢者になることを前提に、高齢者や障害のある人々は特別な存在ではないし、その人格が尊ばれ、一般の社会の中に普通に参加し、平等に生きる権利があることを認識する。 イ ボランティア活動等の体験を通して、様々な福祉にかかわる問題を認識し福祉政策や社会的諸サービスが対等の生活原理であることが理解できる。 ウ 福祉にかかわる様々な問題について、日本と諸外国との取組とを比較したり、福祉政策の問題点について分析したりして、考えをまとめ、自ら進んで行動したり、提言として発信していったりする。	
職業・進路	職業の価値や大切さ、労働の意義についての理解を深めて、自己の適性や将来について考え、個性豊かによりよく生きていくことのできる資質や能力を育てること	ア 職業の価値や大切さ、労働の意義についての理解を深めること イ 自己の適性や将来についての考えを深めること ウ 将来に向けて個性豊かによりよく生きていくこととする態度を育てること	ア 地域の人々との交流や職業調べ、職場体験を通して、働くことの喜びや厳しさ、働く人たちの仕事に対する思いや責任感に触れ、労働の意義について考える。 イ 地域の人々との交流や福祉活動、職業調べ、職場体験を通して、自己を振り返り自己の適性や将来の希望を考えることができる。 ウ 自己の適性や将来の希望に向けて、自己を生かしながら今の自分にできることを考え行動できるようにする。	ア 職業調べや職場体験等を通して、職場には性差や制度などによる様々な問題点のあることを論理的に理解する。 イ 職業調べや職場体験などを通して、学んだ知識をもとに自己の職業観を振り返り、将来に向けて考える。 ウ 現代や将来を真剣に考え、様々な社会参加の在り方や生き方の選択肢があること、生きがいをもって充実した人生を送ることの意味などを考え行動できるようにする。	
国際理解	国際化の進展に対処できるように、日本や世界の国々の歴史や文化に関心をもち、相互理解・相互交流を通して、世界の人々を尊重し国際社会の一員としてともに生きていくことができる資質や能力を育てること	ア 他国の文化への理解及び他国の文化を尊重する態度を育てること イ 国際社会の一員として、世界の人々と共生していく資質や能力を育てること ウ 地域や我が国の歴史や伝統文化等の理解をするとともに自己を確立すること エ 外国語によるコミュニケーション能力を育てること	ア (ア) 他国の歴史や文化、社会の仕組みなどへの関心を高める。 (イ) 様々な国との共通性や差異を理解し、尊重しようとする。 イ 様々な国々の人々と交流し、互いのよさを認め合い協調し活動しようとする。 ウ 地域や我が国の歴史や文化、社会の仕組みのよさを理解する体験を通して、日本人としての自覚を持ち、自己の在り方を考えようとする。 エ 外国語によるコミュニケーションを積極的に取り組もうとする。	ア 他国の歴史や文化、伝統を包括的・体系的に理解し尊重しようとする。 イ 様々な国の人々と積極的に交流し、交際親善に努めようとする。 ウ 国際社会の一員として、日本や日本人の役割について考えようとする。 エ 外国語で意思の疎通ができるようにする。	
環境	身近な自然との関わりを通して自然の持つ豊かさや大切さに気づき、人と環境の関わりについての理解を深め、広い視野で自分のできることを考え、自然と共生するために環境保全やよりよい環境を創造する資質や能力を育てること	ア 体験活動を通して、自然に対する感受性や環境に対する関心を育てること イ 環境問題と社会経済の在り方や生活様式とのかかわりについての理解を深めること ウ 環境の保全やよりよい環境の創造のために主体的に行動する実践的な資質や能力、態度を育てること	ア 地域の人々との交流や体験活動を通して、地域の自然環境や職場環境、学習環境、高齢者や障害者が住む町等の環境等について関心をもつことができる。 イ 地域の自然環境の現状と問題や職場環境、学習環境、高齢者や障害者の住む生活環境の現状と問題に気づき、人々の責任や役割について理解し、よりよい環境について考える。 ウ 地域の自然環境の保全や職場環境、学習環境の問題と改善、高齢者や障害者が自由に生活できる生活環境の創造について、今の自分にできることを考え行動できるようにする。	ア 地域規模・地球規模の環境問題、自然破壊などを多様な視点から科学的に分析し、産業と自然環境とのあるべき姿について関心をもち、考えることができる。 イ 人間と環境との関連性を幅広くとらえる中で諸矛盾を見だし、人間の責任や役割について理解し、よりよい自然との共生について考える。 ウ 環境問題の解決やよりよい環境の創造のための取組とそれの伴う諸矛盾に気づき、将来に向けてどのように行動していくことがよいかを考え、今の自分にできることを日常の中で行うことができる。	
地域	家庭や地域社会、学級や学校における生活上の諸問題について理解を深めるとともに、自他を尊重しつつ、学級・学校・地域社会の一員としてよりよい民主的な生活の実現に意欲的、協力的に取り組もうとする資質や能力を育てること	ア 家庭や地域の伝統・文化・行事・生活習慣・政治・経済・産業などの現状や問題点についての理解を深めることや学級・学校の行事、学級や学校で生じる生活上の問題などの特質や背景についての理解を深めること イ 学級・学校、家庭や地域社会の構成員の一人として、その現状や問題点について解決・進展に努める資質や能力を育てること	ア 地域や生活上の問題について地域の専門家や様々な立場の人の意見を聞いたり、客観的、科学的にとらえたりして解決の方向性を探る。 イ 地域社会を構成する一員としての自覚と誇りを持ち、他と協力してよりよい郷土の創造を目指した取組を行う。	ア 地域社会の現状や問題点を政治、経済、産業など、多面的、多角的な視点でとらえ、分析・判断し、解決しようとする。 イ 地域社会を構成する一員としての自覚と誇りを持ち、自他を尊重しつつ、よりよい社会の実現を目指して、その発展に尽くそうとする。	